

始



503-202

浦谷甫水著

人生問題

自殺と自我

東京 弘道館 發行

大正 12. 5. 28 内交

半死半生の自決をのめられし我、

人生問題の自決

弘道館

東京

612 192 自決論

浦谷甫水著

此の書に自決論を著しんとす  
老死を待つに自決ありと  
して生をうし 確記するものなり

序

生を欲して死を厭ふのは世の人の常である。然るに、一面に於ては、殺されることも構はずに、行動する者もあれば、軽々しく自殺する者さへもあつて、其の數、決して少くない。是れ、實に吾々人生に於ける、最も重大なる矛盾である。若し、能く人生の何ものたるか、自我の何ものたるかを、明知することが出来たらば、斯かる矛盾も、亦、自ら理解することが出来やう。横目、縦鼻、頭を上にして立行することは、世界幾億の人皆同じである。而も、食、衣、住等の事はじめとし、職業、娛樂、政治、教育、道德、宗教等の事に至るまで、之に對する趣味、批判、態度等、實に千種萬別である。嚴密に言ふならば、二人として、相同じと云ふことはない。若し、能く、其の斯くの如くな

序

道徳的付けたる世の上から物を見る。切石  
フ何れも其の如くを有する。其の如くを見る。其の如く。  
然りや否や斯く云ふ人は死其の如く心に芯から直に面  
ないうた  
自命は  
さう思ふは

味

る所以を明知することが出来たならば、人生及び自我の何ものたるかをも、亦自ら理解することが出来やう。是れ、余の爰に之を論述して、本書を公にするに至つた所以である。之によつて、多少たりとも、人生問題に心を苦しめるの士を、裨益することが出来たならば、實に望外の幸である。

大正十二年二月十一日

著者 識

目次

第一篇 人生の最大矛盾

緒言

本説

第一 自殺するもの……………五

- 一、單に現世の苦痛を免れやうとして自殺するもの
- 二、現世の苦痛を免れて來世の快樂を得やうとして自殺するもの
- 三、單に現世に於ける將來の快樂を得られざるを悲觀して自殺するもの
- 四、單に將來の苦痛を恐れて自殺するもの
- 五、單に來世の幸福に憧憬して自殺するもの
- 六、此の世を厭ふべきものと觀じて自殺するもの
- 七、絶對的に意欲を充足しやうとして自殺するもの

目次

第二 他に殺されるもの……………二

第三 一般生物の生活……………二六

第四 人間生活の重なる一面……………三〇

一、自己意識的であり統覺的である

二、意志的目的的である

三、有理想的である

四、責任的である

第五 人間生活は畢竟性格的である……………四

第六 情意の充足は人間生活の中心核子である……………五〇

一、情意の充足は性格と習慣とによつて規定せられる

二、身體の生死は情意充足の全對象ではない

### 第二篇 自己に徹底せよ

#### 緒言

#### 本説

第一 自己とは何ぞ……………八一

第二 自己の生存……………八七

一、直覺的意識

二、生死の欲

三、生死の問題

四、苦樂と幸不幸

五、善 惡

六、欲望の満足と目的

七、性 格

第三 思想と批判……………一八六

- 一、世界觀
- 二、人生觀
- 三、政治觀
- 四、教育觀
- 五、藝術觀
- 六、宗教觀
- 七、性格的構成

第四 價值批判……………二五七

第五 實行……………二六五

- 一、不純粹行爲或は方便的行爲
- 二、純粹行爲或は趣味的行爲
- 三、總括統合的行爲或は目的的方法的行爲

第六 成功……………二六九

第七 德育又は修養に於ける余が根本學說……………二七九

目次終

# 人生問題 自殺と自我

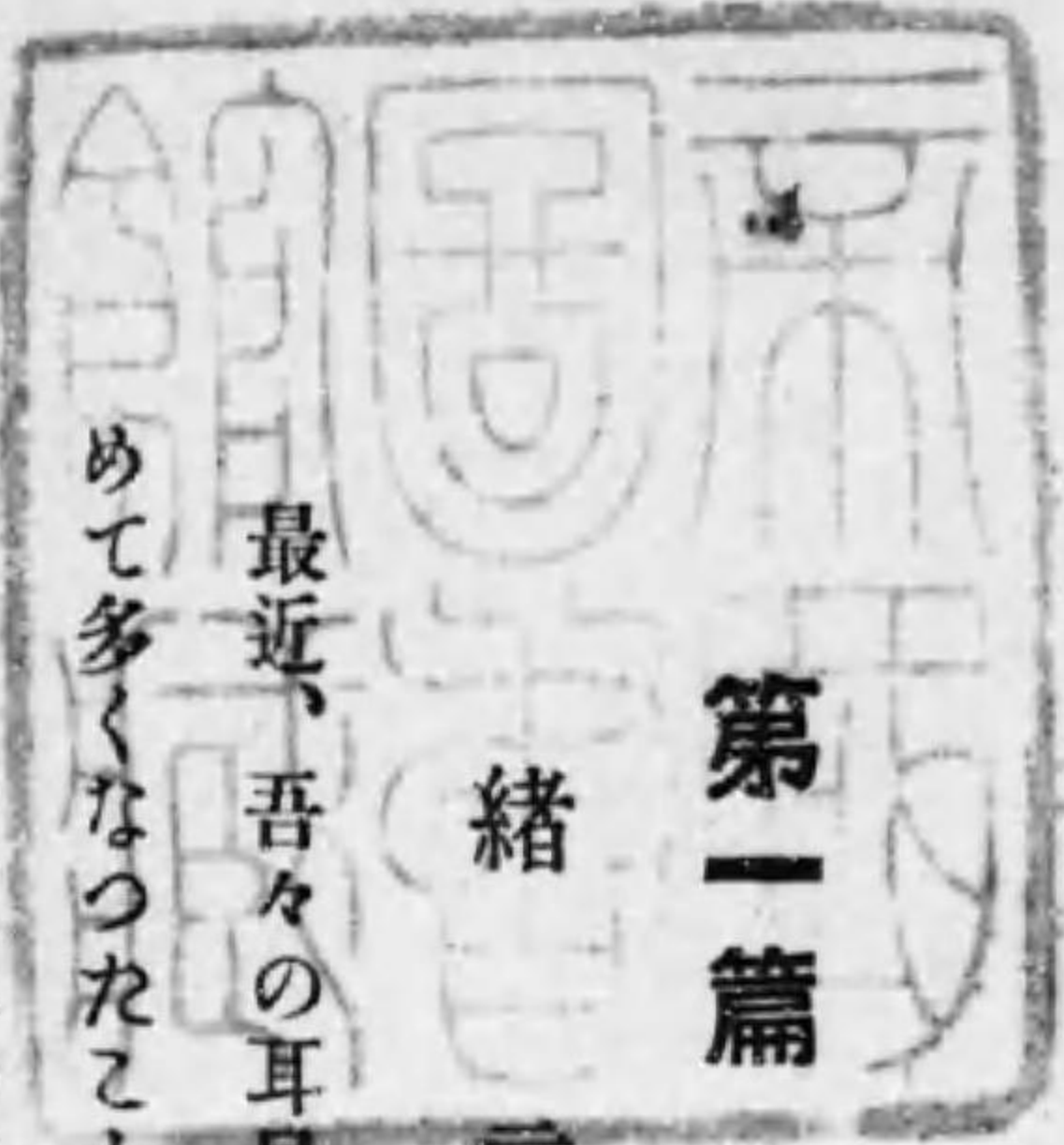
浦谷甫水著

## 第一篇 人生の最大矛盾

### 緒言

最近、吾々の耳目を刺激する、人事現象、社會事相の中で、自殺の數が、極めて多くなつたことは、特に、その著しいものである。昔とても無かつたことではなく、何れの國、何れの社會にでも有ることであるが、現時の、我國に於けるほど、これ程、盛んなことはあるまい。自殺も、偶々有ることならば、それは例外の出來事として看過することも出来るし、又、さうして置いても宜し

第一篇 人生の最大矛盾



浦谷甫水

吾人は常に此の如き一歩の歩みを行はねばならぬ

人生問題「自殺と自我」

いけれども、それが、餘りに頻々と起り、澤山になつて來ると、もはや、特別の事として取扱ふことは出来なくなる。一體、吾々人間は、死ぬと云ふこと、殺されると云ふことは、一番、いやなことであり、恐ろしいこと、して居るのである。普通の人ならば、何よりも先きに、まづ、生きやうとし、生きんが爲には、全力を擧げて盡すのである。殺されるとか、死ぬとか、云ふやうなことは、何を置いても避けやうと努力するのである。つまり、生存と云ふことが、吾々人生の人生たる所であつて、萬事は、これに従屬して、爲に、はじめて、意味あり、價值あるものとなつて來るのである。

然るに、一面に於て、かくの如くに、自殺する者の、非常に多くあるのは、果して何が故であらうか。自殺と云ふことは、他の動物には、決して無いことであり、同じく、人間にしても、極めて幼稚な者や、野蠻人には無いことであらうに死ぬるにせよ、よし有るにしても、其の數や極めて少く、實に例外として、取りのけるこ

我々の生命を現在限り  
断つるに

とが出来るのである。ところが、それが成年者となると、多くなり、特に文明

人になると、却つて多くなつて來るのは、果して何が故であらうか。少くとも、文明といふこと、自殺といふこと、が、相反比例するといふことのないのは、

そも、どう云ふ譯であらうか。元來、生命には、絶対價値を置くべきものではないのであるか。生命を全うするといふことが、吾々人生の目的となるべきことであるか。

存よりも死亡を撰ぶ者の、少からず、あるのは、一體どういふことであるか。生存よりも死亡を撰ぶ者が、澤山に有るのは何が故であるか。生存よりも死亡を撰ぶ者が、澤山に有るのは何が故であるか。生存よりも死亡を撰ぶ者が、澤山に有るのは何が故であるか。

面に於ては、自殺者の決して少くないのは、そも何が故であるか。人生に於ける、此の二大矛盾を、どう觀たらよいか。かゝる最大矛盾を世間の人は、どう

第一篇 人生の最大矛盾

我々は、この矛盾を、  
鳴呼我が死の目的は何なるか  
世界かう悦びするに何のこたはるるがあらうか  
死の目的は何なるか

死由をいふ病者

人生問題「自殺と自我」

四

いもか自分ちり  
御都合ト、生きたる  
ふか人生の最大目的  
たも、ぬかすうな  
おのあてさいとある  
人々を解よ  
みやかの身村も  
人生問題を作らフ  
人生とは畢竟  
死へのプロセス

して何とも思はぬのか。思はなくてもよい程に、當然のことなのか。思つて見ても、考へて見ても、到底、分らぬほどに難問題なのであつて、それで、誰も、能く言はず、又、手をつけることを能くせぬのであるか。

何れにしても、これ程大事な問題を、たゞ打ちやつて置くことは、少しでも、人生問題に心を注ぐ者の、出来ぬことである。生と自殺、この二者の間にはチャンネルと通じた、立派な脈絡があり、道があるのであつて、實は、決して矛盾のことでも、撞着のことでもないのである。同じ人生、或は人生の目的に對して、表街道を行くか、裏道を行くかの、相違であつて、決して、根本的、本質的の相違ではないのである。二者は、充分、完全に統合、一致させることが出来るものである。

かたぐ、他人に殺されても厭はないで、敢て、決死的の行動云爲を致す、といふことをも、共々に研究し、説明し、解決して見やうと思ふ。これが正に本書の目的である。

### 本 説

#### 第一 自殺するもの

いと言ふ、自殺者、正札付きの狂人は勿論のこと、或は痲病或は梅毒等、其の他、種々の病氣の爲、又は勉學、心配など、極度の精神過勞の爲に腦神經に異變を來たし、其の結果として、時に發作的に、自己の身體に傷害を加へて死ぬ者もあれば、他人を傷害して死に至らしめる者もあり、或は錯覺的に他人を傷つけて殺す者もあれば、自己を傷つけて死に至る者もある。が、さう云ふ風なのは、余が、今度、説明を試み、解決を與へやうとする、人生の矛盾問題の材料として取扱ふべき

第一篇 人生の最大矛盾

五



ものでない。これ等は即ち、無意識的、無意的行動の結果であつて、余が是より取扱はうとする所の、意識的、有意的のものとは、全く其の類を異にせるものである。余が此度、取扱はうとする所のものは、正に有意的のものでなくてはならぬ。少くとも意識的のものでなくてはならぬのである。

そして、その意識的或は有意的のものには色々の種類があつて、細かくこれを分ければ、數、限りもないが、先づ、大體、左の七つに分けて見たならば、説明の上に於て、頗る便利であらうと思ふ。

意識的或は有意的に自殺するもの。

- 一、單に、現世の苦痛を免れやうとして、自殺するもの。
- 二、現世の苦痛を免れて、來世の快樂を得やうとして、自殺するもの。
- 三、單に、現世に於ける、將來の快樂が得られざるを悲觀して、自殺するもの。

四、單に、將來の苦痛を恐れて、自殺するもの。

五、單に、來世の幸福に憧憬して、自殺するもの。

六、この世を厭ふべきものと觀じて、自殺するもの。

七、絶對的に意欲を充足しやうとして、自殺するもの。

一、單に、現世の苦痛を免れやうとして、自殺するもの。

それが身體的のものであるにせよ、精神的のものであるにせよ、實に、苦しめて苦しくて、とても堪らぬ、恥しくて恥しくて、とても他人に顔を合はすことは叶はぬ、と思ふ時や、場合に決行するのであらう。欲も得もあつたもので無い。たゞ、もう現在の、この苦痛を除けば、それでよい。ところが、生きて居つては、とてもよい方法がない。どう思つて見ても、所詮、この苦痛の根本

を絶つより外道はない。この身體があればこそ、斯うして苦しい思ひをするのである。さうだ、寧ろ、一ト思ひに死んで仕舞はう。と、かう決心をするのであらう。あらうが、これは、餘程人生生活に對して、單純な考へを持つて居る者か、でなければ、生命欲の、極めて少い者かである。生命欲の多い者であるとか、人生に對して、複雑な考へを持つて居る者かであつたならば、とても、さう簡單にあきらめの着くものではない。尤も、人生に對して、複雑な考へを持つて居り、随つて、また生存といふことを、何よりも大事な必要條件である、と思ふ者であつても、而も、また、一面に於て、さういふ欲望や、境遇や、思想やを打消して、なほ、充分に餘りある程に、苦痛に堪へられぬ、病氣とか、懊惱とか、極度に激越であるとする、或は、また、かやうな思ひ切りをするに至ることもあるであらう。何れにしても、結局、其の身心に於ける、現在の苦痛と、絶對的生存欲又は相對的、條件的生存欲との對比關係によつて、規定せられるものであると、かう云はんければならぬ。

## 二、現世の苦痛を免れて、來世の快樂を得やうとして、自殺するもの。

これは、前の、單に現在の苦痛を免れやうとするものとは異つて、今の、この世に於ての苦痛を免れた上に、來世の、將來の快樂を得やうとするのであるから、必ずや、其の前提として、未來世の有ることを信じ、且つ快樂を得らるるものと思つて居るのである。たとひ、其のことが、他人から見れば、空想であらうと、迷信であらうと、將た何んであらうと、當の本人に取つては、大事の、大事の、唯一の信賴であらねばならぬ。迷信とか、空想とか言ふのは、それは、他人からの批判であつて、本人に取つては、其の信賴は、絶對的價值あり、權威あるものである。それ故に、此の種の自殺者は、單に現在の苦痛を除

かうとして自殺する者よりも、自己の行く先きに於て希望を持つのであるから、前者よりは、餘程、仕合せな者と云はんければならぬ。其の死を執行するに至るまでの、心理的経路に於ても、今や、之を實行しやうとする時の心理状態に於ても、共に、前者の、全く消極的なのに比して、餘程積極的快感を有するものと云ふべきである。或は、この世に、愚圖々々して居て、恥を搔くやうなことに遭遇より、寧ろ、勇ましいことよ、立派なことよと、譽めた、へられるやうにと自害するもの、類も、亦此の部類に入れてよからうと思ふ。

三、單に、現世に於ける、將來の快樂を得られざるを悲觀して、自殺するもの。

これは、元より第二のものとも異なるが、亦第一のものとも異なる。第一のは、單に、現在の苦痛を免れさへすれば、それでよいのであるから、若し、死なずして、その苦痛を除くことが出来るならば、何も自殺するには及ばぬのである。即ち、其の、直接の目的は、全く消極的なのである。ところが、この第三のは現在に於ては苦しいよりも、寧ろ楽しい境遇に居るかも知れず、少くとも、さう、いやな生活はして居ないのである。ところが、それが、行末を考へて見ると、色々の事情や、關係やで、とても、今日までのやうな楽しい生活をして行くことは出来ない。と、かう觀じて來て、一向、希望も何も無いから、寧ろ死んで仕舞つた方がよい、と、かう決心するのであらう。若しそれが、或は、深い深い戀愛に陥つて居る者が、親や兄弟やなど、他の不同意で、到底夫婦になる見込みが立たぬ。とか、云ふやうなときに遇ふと、それでは、將來、何等楽しいことはない、生き甲斐のない生活である、それよりか、寧ろ死んで仕舞つた方がよい。と、かう決心するに至るのであらう。かう云ふのは、將來

に於ける、楽しい生活を否定せんければならぬやうな關係に、其の身を置かれることを自覺するところから、乃ち生存の欲望を無くして仕舞ふのである。他人から見れば、そんなに思はなく、幾らでも、他に生活の欲望を作つて、それから夫れへと、充足し獲得して行けば、それでよかりさうなものであるけれども、それが、當の本人に取つては、さうは行かぬのである。其の人の性格、經歷、境遇等から自然と、かやうに判断し、かく決意せぬければならぬやうに、心理の過程が、仕組まれて行くのである。とにかくも、此の種、自殺者の心理は、絶望から來た、生命の否決である。其の直接の目的の上から見ると、第一の、現在の苦痛を除かうとするのとは、時間の上に於ては、現在と未來との相異があり、性質に於ては、苦と樂との相異がある。が、一つは、現在の苦痛を除く方法が、自殺以外に無いと思ふやうになるのであり、一つは、絶望より生ずべき、將來の苦痛を、自殺によつて無くして仕舞ふと、云ふことになる

のであつて、この點に於て、結果としては二者相似て來るのである。

#### 四、單に、將來の苦痛を恐れて、自殺するもの。

これは、第一の、現在の苦痛を免れやうとするものとは、丁度正反對になるので、將來せんとする身體的苦痛や、世の非難攻撃などを豫想し、或は之を非常に誇大し、恐怖して、さう云ふ、苦しい思ひをして生きて行くよりも、寧ろ死んで仕舞つた方がよいと、かう思ふのであらう。頭の大きい、吸収力の強いもので、色々と遍通、自在に思慮し、分別する者であつたならば、まだ來もせぬ、將來の事で、さう激しく、懊惱するやうなことは無いのである。けれどもそれが、頭の小さい、度量の狭い者であると云ふと、思ふやうに、思慮や分別が流れず、つひ、一圖に凝り固まり、一心に思ひつめて仕舞ふやうになるもの

である。尤も何か身體的に、非常な苦痛を興へらるべきことが、極めて、明瞭に豫期されて居るとか、或は精神的に非常な恥辱を興へられるに定まつて居るとか、云ふやうな場合には、特に、修養の出来た、偉い人物でもなければ、容易に堪へられるものではない。乃ち、前後、左右を顧慮するだけの、餘裕も猶豫もなく、寧ろ、一ト思ひに死んで仕舞はうと、自決するに至るやうなことも、あるであらう。

##### 五、單に、來世の幸福に憧憬して、自殺するもの。

吾々の生活は、死ればそれで仕舞ひである、物理的又は化學的に解體を爲し、還元を爲すのみである。身體的には勿論、精神的にでも、個體的に、人格的に再生する、などと云ふことは、到底ありうべからざることである。かくの如き

ことを思ふのは、實に幼稚なことであり、單なる空想である。と、かう考へて來るのが、今日普通人の一般である。少くとも、知識階級の者、教育ある者の一致する所である。あるが、それでさへ、時々、詩的に、來世の、身體的存在或は靈的生活を想はぬでもない。少くとも、さう云ふ永恒的生存を希ふ心持がするものは、決して珍らしいことではない。理窟に於ては、テンデ問題にならぬやうなことではあるが、感情に於ては、それを肯定するのは、決して悪い氣持のするものでない。誰もが、何となくさう感じて居るところである。であるから、或は、小供、婦人又は科學的知識の無い者やなどが、來世の生活を信ずるやうなことのあるのは、決して無理とは云へぬ。特に、それが、幼い時から、さう云ふ様な低級な、小説的、宗教的、教育を受け、感化を蒙つた者で、もあれば、かくの如き信念を持つといふことは、寧ろ當然のことであらうと思ふ。そして、さう云ふ人の目から見、耳から聞かなくとものことであるが、現世の

人事百般をはじめとし、其の他自然界のことだらうが、何であらうが、眞に吾の意に満つるものはなく、寧ろ却つて心苦しいこと、厭やなこと、恐しいこと、悲しいことが多いのである。であるから、平素から、天國だの、極樂だの、と云ふやうな、理想的世界の存在を鼓吹せられて居る、少青年や婦女子の中で、特別と其の純なる心を煽られる素質があり、傾向を有する者でもあると、何かの因縁、刺激で、遂には罪と穢れの多い、こんな世界を去つて、一日も早く、さう云ふ美しい、尊い世界へ行きたい。と、かう思ひつめるやうになるのは、決して無理ならぬことである。此の種の自殺者の多くは、先づ、かう云ふやうなところから出るのであらう。多少、性質に異なる所があるけれども、單に、死後の名譽を豫想して、勇敢なる自殺をする者も、亦、此の部に入れてよからうと思ふのである。

⑥ 六、此の世を厭ふべきものと観じて、自殺するもの。

これは、第一の、單に現世の苦痛を免れやうとするもの、及び第五の、單に來世の幸福を憧憬して、するものと、相似て居る所のものである。が、併し、第一のは、特に、これとか、あれとか、著しく苦痛を與へる、具體的の物事が、其の本人の腦裡を、絶えず、激しく刺衝して居る、夢寐の間にも忘れられぬ。と云ふやうなことがあるのであるけれども、この方は、別に、さう云ふやうなことはなく、たゞ、何となく、此の世が寥しく、陰氣に思はれて堪まらぬといふやうな、寧ろ、其の人の、先天的氣質、氣分から來たもので、それが、次第次第に高調し昂奮して來て、遂には、え、一層のこと、一と思ひに死んで仕舞はうと、かう、なるのであらう。尤も、さう云ふ人にしてからが、幸に周圍の境遇や、何か、常に其の人の氣分を良くし、樂しうするやうな具合に自然と

出来て居つて、遂に、さう云ふ性質的厭世自殺をするまでに至らしめずに、終ると云ふやうな、さう云ふこともあるであらうし、或は、又、これと反對に、さう云ふ性質、氣分で居る人を、いよ／＼ますます、悪しく刺激し、これを煽つて、かた／＼、遂に、何やかや、総合的に死を決せしむるに至ると云ふやうなこともあるであらう。さうかと言つて、第五のやうに、別に來世の幸福を希うて、それに憧憬して、行かうとするのでも、決してない。或は朦氣に、何とはなく、こんな様なことも思つてゐるかも知れぬけれども、それと、明かに意識して、有意的にそれに向つて、進んで行くと云ふやうなことは決してない。ともかくも、第一ともちがへば、また第五とも異つてゐるのである。

七、絶對的に意欲を充足しやうとして、自殺するもの。

これは、人生問題について色々と研究し、思慮し、考察した結果、須く死すべしと判断し、意志の決定を爲すものである。常に、内的に意志の決定をしたのみならず、機會を見て、之を實行するに至るのが、即ちこれである。眞に、よく、此の部類に屬するものは、其の數極めて少く、簡潔に之を言へば、哲學的自殺とでも稱すべきもので、自殺中、最も、深遠なる意味あるものと云はなければならぬ。抑々、吾々が意志の決定をするに至るまでには、たとひ、それが日常の些事であつても、それ／＼多少の思慮をし、考察をしてから之を爲すものである。申すまでもなく、其の根本中心には、其の人、各自の性格が控へて居り、習慣が伴ひ、そして、それが、其の時々の周囲の環境、事情の下に、當の事物に對して感知し、或る種の氣分を以て、之を思考し、かれ、これと綜合的に決意して、終に行動云爲するに至るものである。況んや、若しそれが、一身上の事であるとか、一家の大事であるとか、重要な問題に對して、あれば、

それに對して、意志を決定するに至るまでには、すべての心理作用が、色々様々に複雑、深刻に活動して、然る後、初めて、どう、かうと礎定するに至るものである。であるから、それが、生死の問題だとか、人間究竟の問題だとか、云ふやうな、最も重要なことに逢着しては、どうして、輕々に、容易に之を解決し斷行することか出來やう。事其處に至るまでには、實に千萬無量の思慮、考察を廻らして居るのである。縦に、横に、古今、東西の、學者の説も參考すれば、自己の見聞し經驗せる事實に就ても、亦十分に觀察し思考して居るのである。が、如何に學び、如何に考へても、所詮、死、是れ、正に我が人生究竟の目的なりと極めて深く、極めて厚き確信に到達すれば、遂にそれが、最後の意志決定となり、自殺と云ふ行爲として現はれて來るのは、亦實に當然のことである。即ち、當の本人の品性に基づいた、人格的判断であり、真我の満足であり、絶對的意欲の充足であると云はんければならぬ。

## 第二 他に殺されるもの

本章に於て述べやうとする所の、他に殺される者と云ふのは、必ずしも人によつてのみと、云ふの意にあらざして、水だとか、火だとかなど、其の他、何によつてでも、自分の意志によるのでなくて、被動的に生命を失ふに至る者の、すべてを含むのである。

火災や水害などの場合に、よく有る事であるが、もう大抵にして、よせばよいのに、欲深く、また家の中へ戻つて物を持つて來やうとして、遂に命を失ふ者がある。或は金の溜るのが面白くなつて、欲の上にも欲を掻いて、碌な物も食はず、暑い寒いの厭ひもなく、餘りに働き過ごして、爲に、遂に大病に罹つ



て死ぬ者もある。或は他人から鬼の如くに言はれ、蛇の如くに嫌はれても、なほ飽くことなく、義理も情もなく、たゞ、もう金取ることのみ念として、遂に、その爲に命を失ふに至る者もある。かう云ふやうなのは、すべて物欲の爲に、あたら命を失ふものである。

或は、普通の人なら、誰も敢て登らうとしない、極めて峻しい、斷崖、絶壁に登つて、誇り顔に興がつて居る途端、不思も、足すべらせて、非業の死を遂げる者だとか、或はかく爲しうる者は我れ獨りよと、一廉の猛者振りを見せて、荒波、怒濤に飛び込んだまではよかつたが、思つたよりは強く、信じたほど手足はさかす、遂に死體となつて浚はれる者だとか、云ふやうなのは、その興趣と一種の名譽心とに驅られて、あたら生命を失ふに至るものと云はんければならぬ。

かの、非常な、天才的な文學者や、哲學者などが、そんなに筆を執り頭を使つては、終には肺が悪くなると、いかぬがと、側の者を心配させ、絶えず忠告を受けながらも、なほ止められず、到頭、言はれた通り、肺病になり、血を咯くやうになつても、矢張り依然として執らずに居られず、寢床に居るやうになつてさへ、相變らず書いて書いて、遂には書き倒れに死んで仕舞つた、と云ふやうなのは、實に感心な悲惨事ではあるが、蓋し、當の本人は、さうせずには居られなかつたので、他から、彼れ是れ批難する限りではないのである。

或は、かの政治家が、そんなに權勢を振ひ、政權を恣にするのは甚だ危ない。何日、何時、暗殺されるか知れぬぞと、誰もをして思はしめ、近親をして常に戦々恐々たらしめて居るやうな、さう云ふあぶない境遇や位置に居つても、平氣で、どしどし其の手腕を振ひ、其の政策を改めず、爲に、遂に、あたら貴重生命を亡くするに至る、と云ふやうなことや、或は、宗教家が猛り狂へる異教徒の、群衆のたゞ中で、實に累卵の危きに處して、なほ、且つ、泰然とし、

毅然として、聲を涸らして熱辯を振ひつけ、爲に、遂に毒刃に斃されるに至る、と云ふやうなことやなど、前者は權勢欲の爲に、後者は宗教的信仰の爲に、かくせずには居られなかつたが故である。實に、甚だ惜しいことではあるが、是れ、亦他から、かれこれと批評する限りではないと思ふ。

其の他、醫師や看護婦が、あり／＼と、自己の生命に拘はることがあつても、敢て、其の危険を犯して、遂に、職に殉ずるなどのことから、慈母が、或は愛兒の病氣看護の爲に、或は其の水難火災を救はうとして、反つて自己の生命を失ふに至ることや、若き男女が、其の愛人の爲に、命にかけて危難を犯すことやなど、吾々人間が最も大事がるべき生存欲に背反するやうなことの、甚だ少からぬことは、そも／＼何が故であらうか。余は、是より本論に於て、其の當に然るべき所以を闡明し、且つ、それが、吾々人生に取つて、決して大なる矛盾にあらずして、寧ろ大なる一致であることを説述しやうと思ふのである。が、

今、其の前に當つて、一般生物の生活と、吾々人間の生活との間に、如何なる差異があるかを概説することにしやう。

## 第三 一般生物の生活

假りにも、土地があり、水氣があり、空氣が通ひ、そして光線の射す處には生物がある。尤も、生物によつては、光熱が、その生成、發育に必要なだけの程度に於て、溫度を麻らすことにならぬければならぬ。或は種子より、或は卵より、又、或は根芽より、それづくに生産し、發育して、各自、自然の法則に従ひ、生物の理法によつて生きて居る。動物は且つ動いて居る。自分の居處、棲地を自分で移變さして居る。植物に行はれて居る所の生理は、大抵、また動物にも行はれ居る。けれども、中には行はれて居ないものもある。その代りに植物には、まだ行はれる必要がなかつた生理作用や、生物機能が行はれるやうに

なつて居ることもある。尤も、同じく動物とは言ひ條、高低の階級、差別があつて、もとより一樣ではない。特に、それが牛馬犬猫等になつて來ると、餘ほど高くなつて居り、猿に至つては猶ほ更のことであり、萬事が吾々人間と殆んどちがはない。たゞ、大に異なるのは、神経系統の官能、及び其の發達程度の差異である。併し、吾々人間とても、單に生きて居る、動いて居る、と云ふだけの點に於てならば、他の動物と大して差異するところはない。動物は、植物と共通せる生理作用、生物法則によつて支配されて居る。また、隨つて人間も、植物と相通じての、廣い意味に於ける、生物としての自然の法則に、同様に規定せられ、支配せられてゐることさへあり、特に高等なる動物とは、殆んど異なる所なき、大同、小異の法則によつて規定せられ、左右されてゐると、云ふことは、亦止むを得ない當然のことである。即ち、吾々人間にも、動物的生活の事實があるのは、何も、決して怪しむに足らぬことであり、其處に、また神

ならぬ人間生活としての妙味があるのである。人生の人生たる意義や、特權やは、また、其處にも一面の根柢を有して居るのである。

ところが、此處に面白いことは、植物と云はず動物と云はず、將た、又吾人間と云はず、同じく自然の法則によつて規定せられ、支配せられて生成し、發育し、或は活動して居るのであるが、植物は勿論、動物とても、その受動的に或は期成原因によつて、左右されて居ることを、何等意識せずに、たゞ盲目的に動かされて居るのである。ところが、それが、吾々人間になると、極めて幼稚な者はともかく、三歳四歳と自己意識が出來てくる頃になると、次第々々に、かゝる受動的、無意識的、或は、不隨意的生活の部分のあることを知るやうになり、成長するに従つて、益々その認識が明瞭になつて來るのである。それで、吾々人間は、たとひ植物や動物と同様に、不隨意的生活をなすところが、あるにはあるにしても、前二者は、そのことを全く識らずに居るに、吾々人間だけ

は之を能く識つて居ると云ふこと、即ち吾々人間にも、全く一般生物的生活の部分、範圍のあることを意識的に承知して居ると云ふことが、また、人間生活の一部分となるのである。が、余は、是より更に章を改めて、吾々人間生活の人間生活たる所を、種々の方面より明かにしようと思ふのである。

#### 第四 人間生活の重なる一面

##### 一、自己意識であり統覺的である。

下等な動物は勿論のこと、犬や猫でも、何か食つて居つても、飲んで居つても、これは自分がして居るのであると云ふことを識らぬ。他から食はされて居るのであるか、自分から食つて居るのであるかを知らぬ。たゞ食つて居るのである。暑い寒いのことについても同じで、たとひ、南向の、暖かい處へ来て、踞つて居るにしても、それは、自分が感じたり、考へたりして、其處へ來ようと思つて來たのではない。たゞ自然と引きつけられて來たのである。そして、さう云ふことをも何んにも識らぬのである。冬になれば、自然に毛が多くなつ

got time?

て、寒くなくつて居る事も、夏が來れば、自然に毛が薄くなつて、暑くなくなつて居る事も知らぬ。少くとも、さう云ふ事を自然がして居てくれるのやら、自分の方で、さうして居るのやら、そこの區別は、全く分らぬのである。

小石が飛んで來て、頭を打たれて痛いのも、自分が走つて行つて大石の角に頭をぶつつけたが爲めに痛くあるのも、一向に區別がつかぬ。自分の手、足や自分の身體やが、これは自分のものであると云ふことさへも知らぬ。自分と云ふことが分らず、自己意義と云ふやうなものが全くないのである。

ところが、それが吾々人間になると、極めて幼稚な、赤兒の外は、白痴、狂人でない限り、自分と云ふ意識、自己と云ふ觀念のないものは無い。自分の身體と他人の身體とを區別し、自分の精神と他人の精神とを區別して居る。元より人間以外の物と、自分とを區別して居ることは云ふまでもない。他人から食はされて居るのであるか、自分から食つて居るのであるか、と云ふやうなことは

云はずもがな、其の食物の如何なるものであるかをもよく承知して居る。のみならず、其の食物と他の食物との異同差別を知つて居る。同一種類のものでは、何日、何處で、食つたものとの、うまい貧いの、差別をも知つて居る。若し、それ、その料理法の如何や、滋養の如何やなどに對して、或は常識的或は學識的批判をなすなどのことまでも、考へ來たつたなれば、其の吾々人間の犬猫等の動物と比して、相違してゐることの、如何に著大なるかは、實に驚くばかりのことである。單に食ふと云ふことについて考へて見ても、斯の如くに非常なる相違があるのであるが、それと同じやうな、衣ること、住むこと等に於ても、其の他、萬事萬端何事に於ても、悉く顯著なる差別がある。單に自己と其等、外物とを區別し、自己と他人とを區別し、物事の受動的なるが、能動的なるか、自動的なるか、他動的なるかを識別することのみならず、或は同一事物に對する、時間上、若しくは空間上の比較、判別、或は同一時若しくは同場所

に於ける、異なる事物に對する比較、判別等に至るまで、すべて之を自己統覺の主體によつて爲すところ、是れ、正に吾々人間の人間たる第一次である。即ち、吾々人間には、記憶、經驗と云ふことがあり、前に經驗した、その當時の自分と、今、現に經驗しつゝある、此の自分と、更に、又、將來經驗するであらう、其の自分とを、始終、通して、爰に統覺的自己意識があるのである。今、これを、場處の上から見ても、亦同じことである。前に、何處、其處で食つたあの鯛の刺身は貧づかつたが、今、此處で食うところの、此の鯛の刺身は餘程甘い。今後は、此處で食うことにしやう。と、かう思ふやうなのは、即ち、全く此の統覺的自己意識の致すところである。單に食ふことに於てのみならず、衣、住、其の他萬般の人間の行動云爲は、すべて、此の統覺的自己意識に基づくのである。と、云ふことを知らなければならぬ。

## 二、意志的、目的的である。

前に述べたやうに、吾々は意識的、自己意識的動物である、即ち統覺的であるから、前に経験したことや、今現に経験して居ることやが、苦しいことであり、厭ふべきものであると、將來は、之を再び繰り返さぬやうにしたいと思ふ。それと反對に、若し、其のことが快感を興ふることであり、好むべきものであると、將來もまた幾度でも之を経験して行きたいと、かう思ふのである。之を場所の上から見ても、亦同じことである。已に、鯛のことについて述べたことであるが、前の處で食つたのは貧づかつたから、今後はそれをよして、後の處で、また食ふことにしやうと、かう思ふ様なものが、それである。着物のことにしても、住居のことにしても、亦同じことであり、其の他、何事についても、皆さうである。衣食住の日常生活上のことから、政治、學問、藝術等のこ

とに至るまで、すべてさうである。自分の意欲に適はぬことはどこへまでも之を變改し、進歩、發展さして行かうとするのである。即ち、吾々の五官、六識に快感を興へ、適應するものは、何んでも獲得しようとし、之に反するものは、すべて排除しようとするものである。吾々の性質、趣味、意欲に従つて、時に、日に、月に、年に絶えざる進動をなして行くのが、吾々人間の人間たるところである。一たび、吾々の神経に刺戟を興へた以上、其の事物は、それが内的のものであらうと、外的のものであらうと、心的のものであらうと、物的のものであらうと、何んであらうと、直接にか、間接にか、必ずや、正に吾々意志の材料となるのである。或は衝動的に或は感覺的に、或は感情的に、或は知識的に刺戟となり、判断を興へ、而して遂に意志決定を爲さしむるに至るものである。かくの如くにして、意志の決定をなし、行動云爲に現はすに至る、その心的過程に於て、最も中心となり、核子となつて種々の心象欲動を能く統

制し、一決する所のものは、即ち吾々各自の性格的自己統覺であるのである。

日常の、種々様々なる、微細なる衝動、刺戟又は觀念、判斷から、巨大なる衝動、刺戟又は觀念判斷に至るまで、すべての心的現象や、活動を種々に、またはそれづくに整理、鹽梅して、或る一定の統一的、目的的行動云爲をやつて行く處に、吾々人間の人間たる所があり、人格的價値を認められる所以なのである。たゞ衝動的、本能的にのみ動いて居ないで、盲目的、無意的に生きて居ないで、たとひ、千差、萬別の相異があり、程度はあるにせよ、兎にも角にも觀察、判別等の心理的功程を経て、それ相當の意志的、目的的生活をして行つて居るのが吾々人間であるのである。

### 三、有理想的である。

吾々が、過去に於て經驗したことや、現在に於て經驗することが意に満たぬと云ふと、次第々々に、それからそれへと之を變改し、進歩、發展さして行くやうに意欲し、目的を立てるものであることは、已に説いた通りである。ところが、吾々の生活に於て、これを衣、食、住のことに就て見ても、交通、通信のことに就て見ても、その他、何に就て見ても、現今のそれで、もう充分である、改善を希望し、補足を要するところは毫もない。と云ふ、さう云ふやうなことは、決してないと言つてもよい位である。よしや、或は暫有的には、さう云ふことがあるとしてからが、やがて、直に飽き足らぬところが生じて來、意に満たぬところが出來てくるものである。と云ふのは、元來、吾々自身の方から、或は身體的に、或は精神的に、絶えず變化し移動して行くものであり、且つや、何物についても、何事に關しても、隴を得るとまた蜀を望む、と云ふやうな具合に、より以上、若くは、より以外に欲望を起すと云ふ風に、吾々の心



が自然にさうなつて居るからである。尤も、其處に、吾々人生の進歩があり、發展があるのである。嘗に吾々の心以外の物事に對して、不足を感じ、缺陷を思つて、之を充足したいと希ふて居るばかりでなく、吾々の心、其のものに就ても、亦さうである。否、外の物事に對してよりも、内の、吾が心其のもの、甚だ不完全なものであると云ふことを、實に憾みとすることが多いのである。別に、さう、深く内省せぬ人でも、多少さう思つて居ることであり、出来るものならもつと、矛盾撞著の少ない安靜、平和な状態であらしたいと希つてゐない者はあるまい。出来ることなら、知識と云ひ、思慮と云ひ、感情と云ひ、意志と云ひ、今少しなりとも満足に近づきたい、純靜、健實であらしたいと、心、密かに祈つて居ないものはあるまい。殊に況んや、それが、行住坐臥、夢寐の間にも絶えず修養を念とし、得道を祈願して居る類の人であつたならば、猶ほ更の事である。思慮、分別の甚だしき不完全と云ひ、感性の餘りに

不純で、動搖の激しいことや、意志の情けないほど薄弱なことやなどを、日夜歎息して居るであらう。思へば、吾々人間の心ほど端たなき、みじめなものはない。たゞ願はくば、神や佛の御慈悲にあづかつて、精進、得道、片時も早く自在無碍の境地に導いてもらひたいものと、希願して居ることであらう。世界中の人の中、幾億萬の人の中、心、常に光風靜月のやうで、何等の不安と懊惱とのないものは蓋し一人もなからう。かくの如くに、先づ、吾々は自己そのものの當體から、而も最も直接の心、其のものからして、絶えず修養改善して行かぬければならぬ。が、併し、之に對する外の世界や、周圍の事物、亦皆、實は自己の性情、意欲と、元來判然と區別され、沒交渉であるものでなく、寧ろ密接、不離の關係に於て在るものであるから、矢張り自他内外、共々に相改、交修して行かぬければならぬのである。

衣食住の事から初め、政治、教育、宗教、藝術等のことに至るまで、吾々人

間が、今日までに進歩發展して來たことは實に甚だ大なることであるけれども、而も、なほ不足、不満、缺陷等不完全だらけで、是より先、常に改良、進歩さして行かぬければならぬ。何物に就ても、何事に對しても、吾人各自の意識に於て、それ／＼に不完全だと思ひ、不満足に觀する所を取り除いて、此の所をかうすれば、最もよい、あの點をかうしたら、それで満足に思ふ。と云ふ風に先づ、自己の頭で、過去又は現在に於ての、具象的事物の不完全なるところを完全なるものに構成しかへ、或は、更にその上に、想像又は思考によつて創作した心象を、それを具體化して行かうとする所に、其處に吾々人類の、不斷の進歩、發展があるのである。即ち吾々人間の生活は正に有理想的であると云はんければならぬのである。

#### 四、責任的である。

犬や猫であると、自分から仕掛けて居るのであるか、向うから仕掛けられて居るのであるかを識らぬ。甚だしきは、さう云ふ時に當つて、自分の見聞したり、活動したりして居る、そのことすら識らないで居る、と云ふ位である。それと云ふのも、自分と他との區別をなし、自分を自覺する自意識がないからである。況んや、甲の場所での自分とか乙の場處での自分とか、或は、前の時に於ての自分とか、今の時に於ての自分とか、云ふやうな、さういふやうな、縦横に於ける統覺があるものでなく、將來に於ける自分なんてやうな、そんな觀念などありつこがない。ところが、それが吾々人間になると、自己意識があり、自分の行動、云爲と云ふやうな觀念やがある。一つや二つの乳兒でない限り、狂人や白痴でないかぎりは、さうである。特に、それが十五となり丁年となると、次第々々に明瞭、確實になつて來る。かくして、その自己意識や統覽觀念

が明確になつてくれば来るほど、自分の行動云爲について、責任觀念を覺ゆることが強くなつて來るのである。

前に、自分の爲たり、言つたりしたことのために、今、自分又は他人に對して或る悪い結果が出來て來た場合には、それは、自分の非難せられる筈の罪であり、自分の脊負ふべき義務である、或は自分の辨償すべきことであり、事によつては生命に賭けても償はぬければならぬものである、と思ふのである。之を場處の上から見てもさうである。今、自分が此處で爲した其の行動の爲めに、あすこで、或る悪い結果が起つたとすれば、それは自分の負ふべき責任であると自覺することは時間的關係に於けると同じやうである。そして、是れ、實に吾々人間の他動物との間に於て、品格上、特に著しい差別の生ずるに至る、極めて大事の立脚點である。吾々人間は此處に根柢を有し、それより出發して、或は學術的に眞を欲求して、際限もなく進み行くとか、或は善、或は美を理想

して、之が實現に努力するとか、或は宗教的欲求、祈願に精進し、久遠永劫の絶對的三昧に達道しやうとか、云ふ風になつて、乃ち吾々人間の生活は、爰に、愈々益々複雑深遠になり、微妙幽玄となつて來るのであるが、之れ等現象活動の萬様は、之を個別的に觀ると、要は其の人、各人の天資、性格に因るものといふのである。

## 第五 人間生活は畢竟性格的である

上來、章を追ひ節を重ねて、述べ來つたやうに、吾々人間は、他の動物と違つて、意識的、有意的、目的動物であり、それづくに、大なり小なり、高いか低いか、何れにせよ、皆、目的行動を爲し、従つて、また責任を感じ、理想を畫いて生活するものである。

或は知識欲によつて、何等か自然現象について、眞を逐ひ、理を究むる、科學的研究に孜孜、窮々としてまた餘念も無いと云ふやうな、實に篤學の徒もあれば、或は天資、自ら善とか惡とか、道德的の感や意識に非常な刺戟や特別の興味を持つて、謂はゆる造次にも必ず之に於てし顛沛にも必ず之に於てして、

睡れる外は、事にふれ人に應じて、常にさう云ふ方面の觀察や、推理や、批判やを爲し、更に進んでは、世の人をして、社會をして、出来るだけ道德的たらしめるやうにと、ひたすら、その實現に努力して居る者もある。少くとも、さう云ふ方面の人事現象に就ての修養、考究を怠らぬ者もある。或は、又繪畫や、彫刻や、音樂やなど、すべて美術的、藝術的方面の事物に對して、甚深なる嗜好を持ち、興味を覚え、さう云ふものゝ、集蒐とか、觀覽とか、聽聞とか、いふと、全く寢食を忘れ、更に進んでは、それ等に關する學問、知識の修得にまで、非常な努力をすると云ふやうな人もある。或は、天性、自ら實利的な事を好まず、文學的な事を喜ぶといふやうな者が、さらに、其の境遇や經歷によつて、いよゝゝ、ますますさう云ふ傾向と思想を煽られ、暇さへあれば、かゝる類の書物に目を曝らし、或は物にふれ、事に感じて、之を口にし、筆にすることが、自ら文を成し、詩に成るといふやうな風で、かたゞ他からも感稱し、

奨励するがまゝに、遂に全くの文學者を以て任ずるに至るといふやうなこともある。或は、又幼少當時から、考へることが好きで、特に、人事問題だとか、世界だとか、宇宙だとか、云ふやうなことにについては、考へないで置かうと思つても、何時の中にか自然と考へ込んでゐる、食つてゐる時でも、歩いてゐる時でも、何時でもさうである、風呂の中でも、雪隠の中でも、何處でも考へる、森や、林の中は勿論のこと、墓場などでは、殊に喜んで沈思冥想に耽る、さては寢床は、その最も得意に考想を逞うする所である。と云つたやうな者が、深遠なる、哲學的或は宗教的研究學問に、専ら力を注ぐやうになつたり、或は超世間的言行を敢てするやうになつたり、或は遂に救世主的行動や宗教的態度を持するやうなことになるのは、元より當然のことである。

かくの如く、吾々人間生活の高尙なるものに於ける、思想、行動の方向も、すべて、全く其の人各自の先天的性質によつて規定せられて行くのであるが、

若しそれ、之を同じく冷かなる理知的、科學的研究を爲す者としてからが、植物學をやるか、動物、生理をやるか、物理、化學をやるか、或は天文、地理をやるかは、又其の人各自の性格に、習慣、環境等の、後天的事情が加はつて、爰に初めて、それが定まるのである。倫理學をやる者が、個人本位説を主張するに至るか、社會本位説を主張するに至るか、又、藝術、美學を専攻する者が、現實派に身方するに至るか、理想派に身方するに至るか、又、哲學者が主觀説を取るに至るか、實驗説を取るに至るか、又、宗教に志す者が、佛陀に行くか、耶蘇に行くかは、是れ、全く其の人各自の先天的性質に、加ふるに、其の習慣と環境とが、一つになつて之を規定するに至るものである。

更に、翻つて、吾人各自が、其の職業を選び、事業を爲す等のことについて觀て見ても、また同じことである。彼の、火事だとか、水害だとか、傳染病だとか、人殺だとか、云ふやうな、いやな事だとか、危険な事があるやうな時に

は、一番に駆けつけなければならず、一般人の楽しさうに、遊ぶやうな場合に  
限つて、氣を張つて働かぬければならず、而も、俸給は大したものでもなく、さ  
うかと言つて、別に人から尊敬を受ける、と云ふやうなこともなく、どうかす  
ると、反つて厭やがられる、と云つたやうな、さう云ふ、巡査や刑事を、三十  
年も、四十年も、或は一生が間繼續してやつて行くと云ふやうな者があるが、  
若し、その職務がいやで堪らぬのなら、必ずしも、他に適當な仕事が見つから  
ぬ譯でもなく、さがせば、幾らでも、程の勤めは、あるのである、にも拘はら  
ず、矢張り、同じことを、永年やつて行くと云ふのは、つまり、其の人の性格  
が、他の職業や勤務よりも、其の勤務や職業を欲するからである、と云はなけ  
ればならぬ。それが、直に衣食住に關すると否とに拘はらず、また其の品の高  
いものたると、低いものたるとによらず、日常吾々人間のやつて居る、事や、  
實に千差萬別であり、數や、極めて夥しいことであるが、要は皆、上來述べ來

つたやうに、其の人各自の先天的性質と、之に加ふるに、其の習慣、環境等が、  
より合つて、一つになつて之を規定するものである。

一簞の食一瓢の飲、水を飲み、肱を枕にしても、樂みなほ其の中にありと、  
平氣で済ましこんで居ることの出来る者もあれば、二六時中國事に奔走し、身  
命を抛つて、これでも満足と、大往生を遂ぐる者さへある。さうかと思ふと、  
世間から、畜生よ鬼よと嫌はれてまでも、猶ほ、且つ強慾、非道の、金や色や  
に夢中になつて居る者もあれば、卑怯、未練と罵られても、ひたすら豚のやう  
な生命を惜しがつて居る者さへもある。世は實に様々であり、人生は、所詮、  
夢食う蟲も好きずきである。

マササム何の本然の姿をた  
かてうしてこつたり  
生命を 欲するのみ

## 第六 情意の充足は、人間生活の 中心核子である

吾々の、日常生活に於ける、食衣の事から、極めて高尚なる、學問藝術、宗教等の事に至るまで、人事の一切は、要は其の人々各自の先天的性格の、習慣的、環境的自我實現に外ならぬと云ふことは、已に、上來述べ來つた所であるが、此處には、また、更に之を吾々人間生活の、百般の現象は、すべて是れ、吾々の情意の充足に歸一するものなること、即ち吾々の情意は、吾々人間生活に於ける、中心核子であり、本體である、と云ふことを、多少反復の嫌ひはあるが、これは、本書物に於ての、最も重要な點であるから、章を改めて、全く高尚なる方面に屬する事柄について、縷述しやうと思ふのである。

動物、植物、物理、化學等、諸種の學問をはじめ、其の他一切の、形而下の學問は、元來が、吾々人間の、日常生活に必要であると云ふ所から起つたものである。然らざれば、また精神的要求に促されて、自然に發露した趣味嗜好的所産かである。即ち、一は吾々人生の物質的方面の要求に因つて起り、今、一は精神的方面の要求に因つて生じた所のものである。哲學だの、論理學だの、心理學だの、又は美學だの、倫理學だの、政治學だの、と云ふやうな諸種の學問は、全く精神生活の直接要求か、少くとも方便的要求かによつて起つたものである。でなければ、精神的に、自然に發露した、趣味、嗜好の所産である。若し、かゝる生活上の事實がなかつたならば、決して斯くの如き學問研究の生ずる筈がないのであり、そして、吾々の生活の中心核子は、正に吾々の情意の満足と云ふことであつて、動向だとか、衝動だとか云ふやうな、自發的のもの

から、思慮、撰擇の過程を経る意志行爲に至るまでの、すべて、情意の對象及び其の充足が即ち吾人生活の根本的要素である。そして、如何にして、かゝる充足を成遂ぐべきか、或はかゝる情意の不滿の感は、何故に生ずるかななどの問題、又はその問題の解決などのことは、正に、かゝる情意に附帶すること、その發問者は、また、最も重要な、吾々の理性であり、解決、亦其の理性によつて成さるべきである。吾々の智識、思考は即ちそれがためにあるのである。智識や思考が、吾々の高等なる情意生活に於て必要であることは、恰も感覺、知覺、表象、其の他の生理機能の調節などが、吾々の肉體的生活、又は下劣なる感情生活などに必要なが如きである。若し、吾々に、高等なる情意と云ふ心的事實がなかつたならば、則ち、亦智識、思考、研究等のなかるべきは、恰も吾々の、肉體的生活又は下劣なる感情生活がなかつたならば、則ち、亦感覺、知覺、表象、其の他の生理機能の調節などの、なかるべきと同じである。畢竟、

智識は何處々々までも客分であつて、情意は、常に主人格なのである。吾々の生活に於ては、如何にして、又、何が故に、の前に、先づ、斯くあり、の事實があり、そして、斯くあるべし、の理想が生ずるのである。先づ情意が發動し、情意が中心となつて動き、そしてそれを整調し、援助し、若くはそれと融合し、一致する所の、智識、思考などと、それとの心的關係によつて生ずる所のものが、即ち眞の理想であり、それが爲には生命をも容易に捧げるに至るのである。天文學、物理學、又は哲學などの、純然たる學究は、一見、吾々、人生生活の實際とは、また、何等關係なきものゝ如く、全く超然として、たゞ學問それ自身、研究それ自身としてのみ存在してあり、また存在すべきものゝやうに思はれるけれども、なほ、能く之を仔細に考察して見ると、歴史的に、其れが起源に溯るまでもなく現時の關係、位置から見ても、又、必ずや吾人の日常生活に、密接不離なる關係のあることを、明かに知ることが出来る。そして、其れ



を研究する所の、學者其の人々が取扱ふ所の事柄それ自身は、直に吾々の日常生活に、何等の利害關係を有することがないにしても、それを攻究し終うせた時には、直接又は間接に、大なり小なり、吾々の日常生活を利益するところがあるであらう、當にあるべきである、かう世間から思はれて居るか、或は、また學者、研究者、其の人の態度、行爲、情操などが、何等かの意味に於て、吾々の精神生活界に影響、感化を與へて、爲に世を裨益する所が少かるべきを、言はず語らず豫期されて居るからである。研究の爲に、非常に熱心である、人並すぐれて勉強する、全く獻身的である。と云ふやうなことで、それ自身が、直に吾々人生に、洵に有益なる教訓を與へ、善き刺戟を與へると云ふことが思はれるからである。そして、單に、冷かなる分解とか、綜合とか、云ふやうな、極めて主知的、純理的な生活をして居る學者が、斯程までに研究その事に没頭して居ると云ふことは、それは、もはや何の爲に、又何が故にと、云つたやう

な、そんな、第二義、三義的な、コンペンシヨナルな生活を、遠く、清く超越して、今は、全く趣味的、絶對的情意生活に没入し、驀進し、吾々人生生活の極致を體現して居るのであると謂はなければならぬ。

一、情意の充足は性格と習慣とによつて規定せられる。

生來、甘い物が好きな者に、側から如何程、これに反對して、辛い物を勧め、食べさせやうとしても、それは、到底駄目である。と同じやうに、生來、くすんだ、じみな柄を喜ぶ者に、けばくしい、派手な衣物を着ると、側の者が、如何程、勧めて見たところで、所詮、駄目である。其の人、各自に、先天的に定められてゐる嗜好、趣味によつてか、または其人が、生れ落ちてから成年になるまでの間に、深く習慣づけられた、第二の品性によつてか、何れにしても、

もはや、之を動かすことの出来ぬ性分によつて、好んで之を食ひ、之を衣るので、また他から如何ともすることが出来ぬものである。配偶者の職業を擇ぶにしてもさうである。如何程金が儲かるからと、側の者がやかましく勧めても、どうしても實業家に嫁ぐのは厭だ、官吏に行く、教員に嫁したいと、言ふ者があるかと思へば、其の反對に、如何に、官吏や教員に嫁することを勧めても、どうしてもそれは厭やだ、たとひ、さ、やかな商賣人にでもよいから行きたいと云ふ者もある。男子の職業を選擇するについても、また同じである。それから、之を高尙なる嗜好、娛樂趣味等について観て見ても、異ならぬので、角力ならば、食はず吞まずでも見て居たいが、芝居ならばちつとも観たくも、何ともないと、言ふ者もあれば、それと反對に、芝居なら毎晩、毎日でも行きたいが、角力なんて、ちよつとも観たくないと云ふ者もある。同じく、觀劇にしても舊劇が好きだと言ふ者もあれば、新派に限ると思ふ者もある。其の他、或は、

喋舌べることや、演説と來たら、何よりも好きだ、面白いと言ふ者もあれば、朝から晩まで、二六時中、殆んど口をきいたことがない、他人に對して話すのは何よりも厭やだ、と云つたやうな、無口極まる者もある。他人の世話ごとなどするのは、死んでも厭やだと言ふ者もあれば、頼まれもせぬのに、何かと口を出し、足を運んで世話やくことの、大すきな者がある。と云ふやうなこともある。之を要するに、吾々人間の生活、百般の行動云爲は、畢竟するに、吾々各自の情意の充足に歸するものであつて、その、如何様に欲動するか、如何なる方面に向つて欲動するか、如何なる事物に對して欲動するかは、詮する所、其の人物各自の先天的性格と後天的習慣や境遇とによつて規定せられるものであると謂はぬければならぬ。

## 二、身體の生死は情意充足の全對象ではない。

余が、小供の時分によく聞かされたことであるが、吾々人間は食うために生きて居るのであるか、生きさんが爲めに食うて居るのであるかと。一寸考へると、そんなことは問題にならぬやうである。申すまでもなく、吾々人間は生きさんが爲に食つて居るのであると、誰も、かう思つて居るのであらう。併し、さう輕にきめるわけにはいかぬ。若し、果して吾々が、生きさんが爲に——單に、身體的に生きさんが爲に——食つて居る筈のものであるならば、何が故に、數へるのに暇のない程に、毎日、毎夜自殺者を頻出するのであらうか。何んでも彼でも、たゞ、もう生きると云ふことに全力を傾倒すべき筈ではなからうか。生命の爲には、どのやうなことをしても構はぬ。生きてさへ居ればよいのである。そして、何としても生きて居られない、力盡きて仕舞つて、いやでも自然に死を待つより外、致方がないと云ふ様になつて死ぬ。と云ふ風に、萬人が萬人な

がら、さうあるべき筈である。ところが事實は決して——さうでなく、實に自殺者が多い、殊に、最近その甚しきを見る。といふ状態である。これ、しかく、容易に、吾々人間は、單に生きさんが爲に食うて居るのである。と言はれない所以である。寧ろそれよりも、これを、逆にひつくりかへして、食う爲に生きて居るのである。と云つた方が正當ならぬのである。元より全ての人間がさうであるとは云はれぬが、少くとも、一部の事實を語つて居るものである。吾々人間の、一部分の者の生活を言ひあらはして居るものである。或は、個人生活の一部分を言ひあらはして居るものであらう。これと同じやうな意味に於てならば、吾々は、生きさんが爲に食つて居るのである。と云ふことも、亦是認せられるのである。即ち、共に不完全なる言ひかたであり、論理を誤つた断定である。それから、また、かう云ふともよく聞かされる問題である。吾々人間は、生きさんが爲に働くのであるか、働くが爲に生きて居るのであるかと。成る程、これ

も問題になる。生物は即ち生物で、たとひ意識的でなく自然的なるにもせよ、皆、生さんとして居るのは元より當然のことである。そして、已に生きやうとして居るからには、光線、温熱、水氣、土壤など、其の他、それ相當の飲食物を要求する。であるから、皆、それらに自然的衝動、動向によつて、生理的活動、變化をなして居る。動物は、又、大に働いて居る。吾々人間亦その埒外に居ることは出来ぬ。否な、野蠻・未開時代の吾々であれば、ともかく、今日の吾々人間——特に、文化生活だの、何だのと言つて、開明の社會や國家に生活して居る吾々人間——になりては、まさか、自然の果物や禽獸やを、遊び半分に取つて、食つて生きて行くと云ふやうな譯にはいかぬ。で、野蠻、未開人、遊牧の民ですら、それ相當の働らきをせんければ生きて行かれぬものであるとすれば、今の吾々は、尙更のこと、たゞ、ぢつとして働かずに、稼がずに、食つて行くことは出来ぬ。よしんば、たとへ、衣食の資料は澤山にあつて、別

に食う爲に稼がずともよいと、云ふやうな、富豪や、華族にしてからが、矢張り何か彼か、用事があり、仕事があり、それが、間接には、矢張り生きて行くと、云ふことに關係をもつて居ることになる。のみならず、若し、さう云ふこととはないとしても、少くとも、食うことの爲に、多少なりとも、何等か身心を用うることはある筈である。であるから、たとひ、直に料理に手を下し、買物に足を運ぶことがないにしても、矢張り、間接には、働いて居ることになるのである。それ故に極めて廣汎な意味から言へば、吾々人間とても、已に生物であるからは、萬人すべて生さんが爲に働いて居ると云ふことが言はれやう。が、併しそれは、能く考へて見ると、全然さうであるとは、容易に言はれない。意識的に、或は目的的に、たゞ生さんが爲に働いて居る、稼いで居る。といふ様な者ばかりでは、決してない。中には、さういふ者も少くはないだらうが、さういふ、單に生さんとする事を、常に意識し、常に目的として、それが爲に窮々

として稼ぎ、孜孜として働いて居るのであると、さう思つて居る者ばかりでは決してあるまい。それよりも、衣、食、住、見物、旅行、交際、遊藝、娯樂、事業、名譽、權勢等何等か自己の性欲を充たさんとして、その目的或は理想の爲に、孜孜營々として、働いて居るのである。そして直接には、寧ろさう云ふ事を意識して居るのであつて、生きんとして居るのであるとか、生命だとか、云ふやうなことは、何等か、さう云ふことを、特に意識し、自覺せぬければならぬやうな、境遇、場合に遭遇したとき、はじめて思ふことであつて、平素は、決してさう云ふやうなことを、一々思つたり、考へたりして居るものではない。況んや、さういふ、單なる生命といふ様な、空虚なことを目的として居るやうな者は極めて少なからうし、理想として居るやうな者は殆どないであらう。かう考察して來ると云ふと、吾々人間は、生きんが爲に働いて居るのでなく、反つて働くが爲に生きて居るのである、と言ひたいのである。尤も、働くには、

達者でなくてはならぬ、生きて居なければならぬ。であるから、従つてまた、間接には、生きることを大事とするのである。そして、働くのは、衣、食、住、娯樂、事業等、其の他すべて目的や理想を實現せんには、先づ以て、物質を得、金を得なければならぬからである。即ち達者で生きて、性格、趣味のまにまに、夫れ々々人生に於ける目的、理想を實現しやうとするからである。尤も、吾々人間の性情、慾望は、實に色々様々であり、仔細に見れば、千差萬別で、随つて、其の人各自が、目的とし理想とする所、亦千様、萬態であつて、決して一樣ではない。而かも、亦これを大別すれば、財産、名譽、權勢、長壽等、數種類に止まるのであるから、無數の吾々人間の中には、或は全く生命そのものを以て直接の目的とする者も少くはないと云ふことになる。又同一人について見ても、決して生命、長壽そのものを、全く重んじないと云ふ者は、恐らく一人もなからう。けれども、又各人に取りても、又全人間に於ても、生命

又は長壽といふことのみを必ずしも性情、慾望の、最後の対象とするには限らない。見方によつては、生命、長壽といふことは、寧ろ、吾々人生に於ける、情意の対象となり、目的となるもの、中の一つである。人生生活に於ける情意の対象とし、目的とする所のものは他にも幾らもある、而して、已に生命、長壽と云ふものが、單に其の対象、目的の一つにしか過ぎざる者としたならば、それが、其の人の情意の対象とせられるか、最後の、行動、云爲の対象とせられるか、目的とせられるか、否やは、實に其の人各自の性格、習慣、境遇等の、如何によるものである。と言はざるを得ない。即ち、吾々人生に於ける情意の対象となり、意欲の目的となる所のものは、それが、主觀のものたると客觀のものたるとに論なく、それが、自己の身體たると、身體以外の物たるとに拘らず、すべて、是れ從屬的關係に於てあるものである。吾々の生とか、死とか云ふこと、自ら殺すとか、他から殺されるとか、云ふやうなことなども、亦、す

べて從屬的關係に於てあるものであつて、決して主動的のものではない。

### 結 言

上來、述べ去り、説き來つたところを綜合して之を考ふれば、吾々人間は、徹頭徹尾、自己の意欲の充足に生きて居るものである。各自の性格と其の習慣、境遇等との關係より生ずる所の、意欲の發動に従ひ、絶えず、之が實現、充足に、努めて居るのであり、そして、其の常に対象とし、目的として行くところの事物は無數なるべく、而も其の中の、主となる所のものは、絶えず、其の行動云爲の中心となり、自ら、其の品性を表はす所のものである。而して、品性より出づる所の、意欲、理想は、其の人に取りて、絶對的の價值あるものである。故に其れに悖るやうなことがある場合には、たとひ生命にかけても、之を排除しやうとするものである。真我の絶對的満足——理想實現——の爲には、生命を、容易に棄つることも、敢てするのである。自己の充足、真我の満足と

いふことは、それは、實に人生生活の第一本義であつて、生とか、死とか云ふことは、寧ろ、其の本義を實現する爲のミーンズであり、第二義のものである。真我の意欲の充足は、即ち、人生の全體であつて、生命はたゞ其の意欲の對象の一たるに止まるのである。少くとも、生命は、人生生活の、目的のすべてにわらずして、其の一半である。全體に非ずして、一部分である。生と死と、その何れを取るかは、人生生活中の、單に部分と部分との關係に止まるもので、人生生活の、全體の肯定否定の問題ではない。生をすて、死を取るか、死をすて、生を取るか、其の何れを取るかは、其の人の人生生活に於て、何れが有意義なりや、によつて定まるのである。其の人の、其の時、その場合に於ける真我の絶對的充足は、生なるか死なるかによつて定まるのである。死ぬるとか生くるとか、云ふことが、單獨に問題になるのでなくて、たゞ、それ真我充足の結果が、死となるか生となるか、どうかと云ふのみである。生と死とは、人生生活

に於ては、單に形の上で反對のやうに見えるのみであつて、其の實、何れも、同一系統の、人格的顯現に過ぎないのである。生も、人生に於ける從屬的目的の一つであれば、死、亦、人生に於ける從屬的目的の一つであるのである。決して人生生活其のもの、矛盾でも撞着でもないのである。

之を横に觀察して、其の何が故に、甲が仁をすて、生を取るに、乙は身を殺して仁を成すかは、恰も、職業を撰ぶのに、甲は實業を取り、乙は官吏になるの相異なるが如きで、たゞ、其の人、其の人の、習慣、境遇等の關係に於ける、意欲の性格的充足に外ならぬのである。之を縦に見ても亦、然りて、同一の人が生きて居つて、何等かの、意欲の充足に孜孜として餘念のない時には、其の人の性格と習慣とが其の時、其の場合に於ける、關係事物と、具合よく相適應一致し居るからであり、後、其の人が自殺するに至つたとすれば、之は、其の人の性格と習慣とが、其の時其の場合に於ける關係事物と相容れず、不一致と

なつたからである。即ち、其の人が生をすて、死を撰びたるは、亦、其の人の生に喜んで居つた時と同じやうに、何れも、其の人の、人格的趣味や判断やに基づいたところの行動であつて、其の人の眞我の充足と云ふこと、情意といふことは前後とも一つなのである。

世の多くの人の中には、損も得も入らぬ、恥も何もあつたものではない、ただ、もう生きてさへ居ればよいと、如何に卑怯なことでも、如何に女々しいことでも敢てして、生命をのみ人生の目的として居る者もあれば、或は利益の爲に、或は趣味の爲に、或は名譽の爲に、或は權勢の爲に、或は戀愛の爲に、毫も生命を惜まらずして行ふ者もある。普通には、それ程までに生命に執着するでもなければ、亦斯程までに生命を輕んずると、云ふやうなこともないのである。たゞ、時と場合によつては、敢て生命を抛げ出すほどの、勇猛なる行動に出づる、と云ふ位な所である。が、其の何れにしても、吾々人生は、決して、單に

生死のみのものではない。人生は、實に意欲の顯現であり、生死は意欲の一對象となるものであつて、意欲のすべてではない。中には、一寸見たところ、生命そのものを、人生の直接の目的であるかの如く思つて居る者もあるやうであるけれども、さう云ふのは、矢張り其の人の性格から來、習慣から來た所の意欲の、重なる對象である、と見るより外はないのである。

之を要するに、人生に於ける、生と死との問題は、其の根本義よりして、之を見れば、二者は決して相、背反せるものではなくて、寧ろ、相、一致するものである。生も死も、一の、人生の表現の、大なる二方面とのみ見るべきであり、その主たる所は、意欲の充足、眞我の満足、と云ふことに歸するのである。



## 第二篇 自己に徹底せよ

### 緒言

吾々が、日常生活に於て、着物の縞柄を撰擇するにしても、はでなのが良いと、云ふ人があるかと思へば、じみなのが良いと、云ふ者がある。と云つた風に、一寸とした事でも、一家の問題になる。で、若し、之れが、娘を、嫁にやるとか、婿をもらうとか、云ふやうな事になると、それは、容易なことではない。大きく成つた子供を、何處か、専門の學校に上げると、云ふやうな事でも、さうである。當の本人と、親や兄弟や、其の他二三の親戚縁者と相談する位のことである。それでさへ、各人の、希望、趣味、意見などが、多少違つて、なかなか、話が纏まるものでない。ひよつと、行違ひかけでもするものなら、何日まで、經つても、決定せず、終には、どうして良いか、分らぬやうになり、

迷ひかけると、限りがない、と云ふやうなことをさへもある。中にも、縁談の事が、最もむづかしいので、若しそれが、一旦、くれたり、もらつたりした者が、一年か二年して、別れ話しにでもしやうと云ふやうなことになる、それこそ大變で、關係や、事情の如何によつては、容易に結着がつくものでなく、双方の親や、媒人や、其の他の親戚などに、色々影響するところもあつて、よしや、當の、本人等が、相互に承知するにせよ、なかく、おい、それと決定するものでない。ましてや、一方の本人が納得せぬ場合、特に、男子の方が、未練でもあらうものなら、それは、話が、非常に面倒になり、事が心配になつて来て、軽々しく、または、頑固に、かうと處斷し得られるものではない。其の衝に當る者、實に迷惑至極で、また如何ともすることが出来ぬ、と云ふやうな立場に置かれるやうなこともある。單に、一家の内事であつてすらさうであるが、況んや、それが、事、國家問題だの、世界問題だの、と云ふ

やうなことになると、一寸とした問題でも、其の關係するところが多大であり、複雑であり、随つて、其の決定の如何が、及ぼすところの影響甚だ大である。で、さう云ふ問題について、自己の意見を確定することは決して容易なことではない。單に、一個の國民とし、世界の一員として、直接には、何等責任もなければ權利もない、と云ふやうな立場から、私見として、これを評し、これを判定するのなら、さう、大して困難なことでもない。ところが、それが、自分の言ふことや、することが、大なり、小なり、直接に影響を及ぼす、と云ふやうな、地位や境遇に居る者であるとする、なかく、容易に自分の意見を發表することは出来ぬ。どうかうと判定することは、實に非常に困難である。

かくの如きものであるから、吾々が、日夜、生活して行く上に於て、或は之を、小さな食衣のことから、職業問題や結婚問題やなど、其の他、色々の、一身上の、重大な問題に至るまで、物に應じ、事に當つて、これを判斷し、これ

を處理して行く上に於て、種々の問題に遭遇して行くことは少くない。随つて、また、事によつては、どう判断してよいか、何れの道を歩むべきか、と云ふやうなことに胸を痛み、頭を苦しめること決して少くないのである。極めて、浩汎な意味や、非常に抽象的な概念から云へば、吾々、自分、一個の行動云爲が、どんなことでも、天下、國家に關係ないことはなく、世界、宇宙にまで、大なり小なり、影響を及ぼすべきものであることは勿論である。けれども、極めて限定的に考へて見ても、自分の一舉手、一投足が、單なる自分に、縦横に利害の關係を有することは勿論、また、少し廣い意味の自分、たとへば、親子とか、家庭とか、云ふ上に於ての自分にも、亦少からぬ關係、影響を及ぼすものであることを考へて見ると、一寸としたことを言ふにも、するにも、決して無鐵砲には出來ぬ。況んや、それが、社會とか、國家とか、云ふやうな、自分の屬する團體に對して、直接に責任ある地位に居る、その自分から考へて見たならば、

一言一行、非常に慎まなければならぬことを自覺せずには居られない。

一方に於ては、保守的、傳習的の教育をよいとして、極力これを主張する者があるかと思へば、又、一方には、全然、これに反對して、思ひきつた、進歩的、革新的の教育を理想として、これが宣傳實行に、少からず努力する者がある。硬的教育法を、最善のもの、やうに鼓吹する者があるかと思へば、軟的教育法に限ると、一心になつて居る者もある。と、云つたやうな具合に、同じく教育のことに就ても、その主義、方法等が、全然、相反するやうな行きかたをしやうとして居る。政治のことにしても、亦さうで、一方に於ては、由らしむべし、知らしむべからず、或は、極めて、保守的、專政的な仕方を、上乘のもと、する者があるかと思へば、又、一方には、全然これに反對して、徹底的に、共和的な方法に限ると、その發展に心血を傾倒して居る者もある。尤も、何事も中庸がよいからと言つて、教育のことにしても、政治のことにしても、

何時でも、反對説の間を行くことを努めやうとする、極めて穩健的態度に出づる者もある。果して、その何れが、吾々の賛與すべきものであるか。これを思考し、判斷し、實行的態度を確立することは、決して容易なことではない。

若し、夫れ、自分の處世上、或は人生觀上、それが、道德問題や、宗教問題やなど、最も重大な問題になつて來ると、決して、一朝一夕にして解決のつくものでない。煩悶、懊惱、時は一年と過ぎ、日は二年と経つても、なほ、且つ、容易に安定の域に達しやうもなく、あはや、不可解の深き淵に轉げ落とされやうとすること、その幾度なるかを知らぬ。と、云ふやうなことに遇ふかも知れぬ。

甲の識者の、以て是なりとする所、乙、これを非とし、この識者の、以て是なりとする所、甲、これを非とする。先輩の容るゝ所、朋友これを許さず、朋友の善しとする所、先輩これを惡し、とする。數多き俗人に賞されるれば、數少き

學者宗教家に笑はれ、學者宗教家に褒められるれば、俗人に貶される。物質的成功と精神的人物のそれとは、相一致せぬのみか、寧ろ却つて相反する。と、云つたやうなことは、是れ、眞に今日の、世の中の實狀である。かう云ふ時代に於て、平和に、安靜に、何等の苦惱なしに暮して行くと云ふことは、それは、なか／＼容易なことではない。物質本體で行かうか、精神主義で行かうか。自分さへ都合よければ、他人はどうなつても構はぬと、利己主義で通らうか。他人のことも亦大に顧慮しつゝ、やつて行かうか、或は、全くの利他主義で進んで行くことにしやうか。世の中のことは、所詮、金と、力と、知識との問題ではなからうか。それとも、果して、正義だの、仁惠だのと、云つた道德が最後の勝利者であるであらうか。自分以外の者の言ふことや、することは、どうでもよい。他の者が何んと云はうと、どう評さうと、自分さへ善いと思ひ、満足を感じたなら、何が何んでも、やつてのけることにしやうか。いや／＼、矢張

り、他人や、世間の者の言うことや、することに従つて行くことにしやうか、さうすることにしてからが、数の多い、世間一般の方によつたが善からうか、数は少からうとも、高尚であり、立派であり、極めて、道徳的であると、かう思はれる人々の、言うことや行ふところに従はうか。自律的に立たうか、他律的に行かうか。たゞしは又、いゝ加減に、これが中庸だ、程だと思はれる邊を通つて行かうか。或は、どうせ、俗世間の人の言ふことや、することは、つまらぬものだ。そんな、有象無象の、批評や、毀譽褒貶やは、物の數にもならぬ。我れ、心に於て、眞に、確固として、深く信ずるところであつたならば、たとひ、千萬人が千萬人ながら、世皆擧つて、我れに敵對しやうとも我れ敢然として言ひもし、行ひもしやう。殺されやうと、どうならうと、そんなことは構ふことはない。たゞ自分は、自分の本心に對して恥づるところもなく、眞實心に満足さへしてもらふことが出来れば、それで充分なのである。天地、神明に對

して、何等恐るゝところがなければ、それで安心である。それが、人生の究竟である。と、かう云ふやうに思ふ者もあらう。其の何れにしても、種々なる人生問題が、今日の、吾々の頭に、絶えず起伏して止まないものである。

かう云ふやうな、色々、様々な、複雑し、紛糾して、限りのない問題に、絶えず逢着しながらも、なほ、能く泰然として、物に應じ、事に應じ、人に接し、世を渡つて行かうとするのには、果してどうしたらばよからうか。どう云ふ方法が、より善き、或は、最も善きものであらうか。如何様にして、如何なる道を歩むが、最も安全で、最も幸福であるべきであらうか。そして、其の究極の、根本方針は、何であるべきであらうか、何を根柢として立ち、何を標的として進んで行くべきであらうか。それは、他ではない。能く自己と云ふものを承知すれば、それでよいのである。自己と云ふものは、一體どう云ふものであらうか。眞の自己とは、果して何んであるか。吾々は偽りの自己や、假りの自己や、

一時的の自己やに煽られたり、迷はされたり、捉へられたりして、それで苦しんで居るのではなからうか。果して、能く、真我を知り、純我に歸り、本我に生きることが出来るやうになつたならば、吾々は、實に自由な、楽しい、幸福な、眞の人生生活を送ることが出来るやうになるのである。謂はゆる成功者でなく、眞の成功者となつて、立派なる生涯を了へることが出来るやうになるのである。正に「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」てふ、人生味を味識することが出来るのである。余は、元より、淺學非才である。本書は、たゞ一の小冊子に止まるけれども、これは四十年來の、長きく余が苦惱より、自然と煎じつめられた、實際的體驗によつて得たる成果である。かたたく止むに止まれぬ、發表の衝動にまかせて、他の一篇と合せて、これを説述するに至つた次第である。

## 本 説

### 第一 自己とは何ぞ

犬や猫であれば、何か自分が食つて居ても、また飲んで居ても、それは、自分、自らがして居るのであるか、他から、さうせしめられて居るのであるか、どうであるかを少しも知らぬ。のみならず、其の食はされて居る物其のものと食つて居る、自分其のものとの區別さへも全く知らぬ。暑い寒いのことでも同じで、日當りのよい、南向きの、暖かい縁側で、いかにも楽しさうに、日向ぼつこりをして居るにしても、それは、たゞ、さうして居るのであつて、自分で

これを感じたり、知つたり、考へたり、意つたりして、そして、やつて来て居るのでもなく、また、さうして居るのだと、云ふことさへも思つて居ないのである。或は、誰か悪戯ずきな小供に、突き落物落とされて溝へ落ちたのも、自分が足を踏みはづして落ちたのも、全く差別はつかぬのである。自分の手足や、身體やが、それが自分のものである、と云ふことさへも分らぬければ、自分と自分以外の物との區別をさへも知らぬのである。即ち、自己意識といふものが、全然ないのである。ところが、それが吾々人間になるといふと、極めて幼稚な、赤ん坊の外は、白痴や狂人でない限り、自分と云ふ意識、自己と云ふ觀念のないものは無い。自分の身體と、他の物との區別は勿論のこと、他人の身體と自分の身體とを區別し、又、自分の精神と他人の精神とを、劃然區別して居る。自分から動いて居るのであるか、他から動かされて居るのであるか、自分の方から爲して居るのであるか、他の方からさせられて居るのであるか、どうであ

上野 誰か悪戯ずきな小供に、突き落とされて溝へ落ちたのも、自分が足を踏みはづして落ちたのも、全く差別はつかぬのである。即ち、自己意識といふものが、全然ないのである。ところが、それが吾々人間になるといふと、極めて幼稚な、赤ん坊の外は、白痴や狂人でない限り、自分と云ふ意識、自己と云ふ觀念のないものは無い。自分の身體と、他の物との區別は勿論のこと、他人の身體と自分の身體とを區別し、又、自分の精神と他人の精神とを、劃然區別して居る。自分から動いて居るのであるか、他から動かされて居るのであるか、自分の方から爲して居るのであるか、他の方からさせられて居るのであるか、どうであ

例は、夏の極端な暑さ、冬は、極端な寒さ、これらは、自然の摂理である。人は、これに抗して、生活を営むのである。これは、人間の本能である。人は、自然の摂理に従って、生活を営むのである。これは、人間の本能である。人は、自然の摂理に従って、生活を営むのである。これは、人間の本能である。

体健

るか、と、云ふやうなことを、能く自識しないものとしては決してないのである。僅か、一ト月ばかり前迄は、浴衣一枚引掛けることすら出来なかつた程に、暑くて堪まらなかつたのが、今日では、單物一枚では寒いぐらゐである、羽織を引掛けんければ居らぬと感ずる、この我れは、やがて、間もなく、裕でも寒い、綿入でなくては叶はぬと云ふことになり、さうかうして居ると、じきに、火鉢が欲しくなり、ストーブの側を離れたくなくなるであらうと、將來を想ふ我れと、同じ我れである。

幹の周圍が、四尺ほどもあらうかと思はれる梧桐が、三本も蔽ひかぶさつて居る、北向きの風通しのよい、二階の室では、全く夏を忘れて居たのに、それにも反して、此の室は、朝からガン／＼と、日が照り込み、おまけに、少しも風の通さぬ、下座敷なので、實に暑くて暑くて堪らぬ、が、此の隣室に居る人は、なほ、一層苦しいことだらう、同じ向きであるが上に、間は小さくあり、

この室は、朝からガン／＼と、日が照り込み、おまけに、少しも風の通さぬ、下座敷なので、實に暑くて暑くて堪らぬ、が、此の隣室に居る人は、なほ、一層苦しいことだらう、同じ向きであるが上に、間は小さくあり、

八三  
例は、夏の極端な暑さ、冬は、極端な寒さ、これらは、自然の摂理である。人は、これに抗して、生活を営むのである。これは、人間の本能である。人は、自然の摂理に従って、生活を営むのである。これは、人間の本能である。

天井は低し、おまけに、後ろは臺處であつて、絶えず、火を焚いて居るからなあ、と想ひやる我れは一ツである。

中學校の時代には、全く怠けて居つて、ちつとも出来なかつたけれども、高等學校に来てからは大に勉強するやうになつたので、成績が非常によくなつて来た。此處を卒業する頃には、一ツ、一番で出てやらう、そして、大學も亦一番で、と、かう、過去を顧み、現在を思ひ、將來を希望する、その我れはちがはないのである。

かくの如く、これを時間の上から見ても、また、之を場處の上から見ても、過去に於ける経験の主體は、今、現に経験しつゝある、同じ我れであると自覺し、また、將來に於ける種々の経験も、同じく此の我れなる主體が爲すのであるべしと確認して居り、またそれと同様に、前に甲の場所に於て経験せる我れは、今、此の乙の場所に於て経験しつゝある、そして臆て、丙の場所に於て經

験するであらう、その我れと、全く同一である、と云ふことを、能く自覺し、確認して居る。是れ、正に、吾々人間世界に於ける萬事の根本事實であり、最も重要なことである。即ち、かゝる統覺的自己意識があればこそ、吾々人間には、目的が起り、理想が生じ、道徳もあるのである。學術の起るのも、藝術のあるのも、その他何事にせよ、苟も、吾々人間界の特有、特權として、存在し、發展し行くところの、物事は、すべて、實にこの統覺的自己意識に基くのであると云はんければならぬ。

かう考へて來ると、自己とは何んであるかと云ふことは、自ら解つて來る。縦なる時間と、横なる空間とに於ける吾々人間が、直接に感知し、意識する内的經驗界の事を初めとし、自他の身體、云爲其の他、人事界の萬事、萬端、さては、世界の森羅萬象に至るまで、苟も自分が経験するところの事物の、すべての本尊となり中心となつて、これ等を整調し、統一する直接意識、それが即



ち自己意識の當體である。感覺、知覺、感情、意志など、全ての心理現象、活動を通じて、何時でも、何處でも、常にそれらの中心核子となつて、之を統覺する所の、主的意識、それが、即ち自己である。之を、極めて簡単に言へば、自己とは、主的統覺意識である。

## 第二 自己の生存

### 一、直覺的意識。

食つて居る食物、着て居る衣服からはじめ、すべて、自分が日常經驗して居る事物は、果して、實際、さう云ふものが存在して居るのであらうか。食物は勿論のこと、衣服でも、自分の經驗の中では、如何にも最も近いもので、これらの物が、實は無いものであるなど、のことは、夢にも思はれさうなことではない筈である。有るのか無いのか、分らぬのであるけれども、たゞ、心で有ると、さう思つて居るばかりのことである、などは、假りにも考へられさうなことではないやうである。併しながら、それらのものが、或は物理學的に、或は化學的に、絶えず變化しつゝあるものであり、具象的には、片時といへども、

ちつとして居るものではなく、有體に云へば、林檎とか、梨とか云ふもの、彼の羽織とか、此の袴とか云ふものは、極めて暫有的のものであつて、比較的長く存在するものは、實はそれ／＼の概念に止まるものである。而も、其の概念すらも、吾々各自々々に見てすら、年齢の長幼、身體の状態、境遇、位置等のちがひによつて、多少異なるのであり、況んや、それを異なつた人格の上から見るならば、それ／＼多少相異なるべきは、申すまでもないことである。かう考へて來ると、どれが本當の林檎だか、梨だか分らないこと、なるのであり、一體そんな、何んだか正體の分らぬものが、果して在るのであるか、どうか分らぬことになるのである。

住むところの家、行くところの道路、乗るところの車馬等から、その他、日夜直接に、目で見、耳で聞くとところの、花、鳥、日、月、山、川等、經驗的事物のすべての存在を疑がつてかゝれば、何んでも彼れでも、皆疑はれるのであ

る。況んや、それが、人の話や、書物や、新聞や、雑誌などによつて、はじめで、知るところのものに至つては、なほ更のこののである。あるが、吾々は、ともすると、自分の身體のこと、身體そのもの、存在すら疑ひたくなることさへもある。手や足を上げたり、動かしたりすることは申すまでもなく、暑いとか、寒いとか、痛いとか、痒いとか云ふことをはじめ、疲れたとか、睡いとか、食ひたいとか、飲みたいとか、いふやうなことに至るまで、四肢、五官の特殊的感じや、内臓や身體やの全體的感じやは、吾々の經驗としては、まことに近親なものである。あるけれども、それであつてさへ、時により、場合によつては、其れに大變なちがひがあり、些少なる變異ぐらゐは、何時でも、何處でも、ある位であるから、その常體を取りつかまへることが出來ず、随つて之を感知する、自分の身體そのもの、常體さへ、分らぬとなつて來るからである。若し夫れ、それが、目にも見えず、耳にも聞えない、理法だの、神だの、佛だの、何だ

のと云ふやうなものになつて來ると、尙更分らぬことになる。吾々の事物の經驗が、時間や、空間や、關係やの上に於て、或は之を歸納的に、或はこれを演繹的に、綜合したり、分解したりして、そして、其等の同一や、反對や、共通や、差異やを、それ〴〵に纏めては、比較的恒久性あるところを、それを法則とか理法とか定稱して居るのであり、また、神だとか、佛だとか、實在だとか、何とか、云ふやうな宗教的若くは哲學的のものになると、それは、更に其の知的欲求や、情意の満足を追ひつめて行き、想像や推理を詮じつめて行つて、遂に、究竟的存在にまで到達した思想の所産である。

或は死とは、一體如何なるものであるか、死んだ後は、精神とか、心とか云ふやうなものは、どうなるのであらうか。など云ふやうな問題になつて來ると、更に一層面倒なことになつて來る。單に心理の所産であると、冷かに言ひ放つて仕舞ふには、それが、餘りに、吾々の感情に、深い〴〵、直接の關係を有し

て居るからである。神だとか、佛だとか、云ふやうなものも、若し吾々の死の問題、死後の問題などを除いて思考することが出來たならば、それこそ、實に容易なものであらう。さう云ふ哲學的や、宗教的問題は、この死と云ふ問題が引掛つて來るからこそ、非常に深遠な、極めて切實なものになつて來るのであつて、さうでなかつたならば、餘程、淺薄な、一般科學的なものになつて仕舞ふのであらう。かくの如くに、衣食住のことから日夜仰ぎ見るところの日、月に至るまで、自己以外の萬物は勿論のこと、自己の身體その物の存在をさへも疑ふとし、また、勿論、死とか、死後とか、云ふやうなことや、神だとか、佛だとか、云ふやうな大きな、むづかしい問題が、どうであらうと、かまわぬこととし、また其の感覺、幻覺に對する外物や身體などのこともさうするにしても、かく疑ふところの、心其のもの、存在こそは、とても疑ふことは出來ぬ。若しそのこと——その色々と考へたり疑つたりすることを疑ふ、と云ふ

ことになれば、それは、甚だしき根本的矛盾であつて、さう云ふやうなことで、其の疑ふ、或は存在を否定すると云ふことの根柢を無視することになつて、それでは、問題も思考もあつたものでなくなる。で、その、吾々の感ずるとか、思ふとか云ふ、其の心そのもの、存在だけは、どうしても、之を疑つたり、否定したりすることは出来ぬ。即ち、吾々自身の、眞の本體たる、自己意識は、正に、吾々自己の、存在の本源であつて、吾々自己の、直接経験であり、寧ろ自己そのものであると云はねばならぬのである。

## 二。生存の欲。

人間は、誰も、生きて居たいと思ひ、先づ大體に於て、死ぬと云ふことは喜ばぬと云つてよろしい。自殺するもの、心理や、殺されても構はぬと言つて、自

己の欲求に向つて慕進するとか、目的の爲に一生懸命になるとか、云ふやうなことは別として、死ぬとか、殺されるとか、云ふことは厭やだと云ふのは、蓋し、全世界の人、普通の心持ちであらう。二つや三つの、極めて、幼稚な小供は、決して、生の欲求が無い、と云ふのではない。大に有ることはあるが、併し、それが、殆ど全く本能的であり、無意的である。随つて、亦死と云ふことや、殺されると云ふやうなことを、さう恐れると云ふことはない。けれども、それが、四つとなり、五つとなり、六つとなつて來ると、次第々々に、恐れるやうになり、厭やがるやうになつて來、十歳以上になつては、大人に異ならぬほどになつて來る。そして、それが大人になると、かゝる生命欲が強くなり、随つて、亦死ぬとか、殺されるとか、云ふことを甚だ厭やがるやうになる。たとひ、七十にならうが、八十にならうが、普通の場合に於ては、誰も死にたがるものではなく、殺されるのを厭やがらぬものはない。

抑々生物は、それが、植物たると動物たるとに別なく、何れも、生きんが爲めには、全勢力を、それに注いで居るやうである。たとひ、本能的たるにもせよ、無意識的たるにもせよ、苟も生の成遂に都合のよい傾向、動向、さては活動であるならば、他の事實や、條件をすべて犠牲に供してゝも、これを助勢し、これを發展せしむることを努めて居る。かくして、各自、其の天命を全うすることに歸一して居つて、吾々人間の様に、自殺する、と、云ふ様なことは決してない。ところが、それが、吾々人間になると、大に異つて來るのである。極めて幼稚な者だとか、野蠻、未開の者だとかと云ふと、他の動物と同じやうに、たゞ各自、自己の生存を保全せんことにのみ行動して居るのであるが、それが開明人になると、次第々々に變つて來て、自殺する者が生じて來、愈々文化すれば、益々自殺が増加して行きはしないかと疑はれる程に、段々多くなつて來る傾きがある。あるはあるが、矢張り大體に於ては、何時の時代に於て

も、何處の社會に於ても、吾々人間亦、生を欲して死を恐れいやがると云ふのが、普通のことになつてゐる。

併し、一面に於て、また自殺者のあると云ふことは、これ、即ち人間生活の人間生活たるところであつて、それには、深い、今一層根柢的な因由を認めなくてはならぬことである。植物や下等な動物のことは云はずもがなで、それが、高等な、吾々人間以外の動物であつても、彼等動物は、他の一般生物と同じやうに、たゞ生くるが爲に生きて居るのである。たとひ、それが本能的であらうと、盲目的であらうと、或は無意識的であらうと、其の生的傾向、動向、活動等は、即ち、彼等生存のすべてである。生理的生存即ち生存欲であり、生存欲即ち生活の全體であると云つてよいのである。ところが、それが吾々人間、特に文明開化の、吾々人間生活になつて來ると、さうは行かぬのである。元より、吾々人間生活とても、生理的生活——肉體的生活——が、順序としては先きの

ものであり、また、或ひは、見方によつては、生活のすべてに於けるかのやうにも見え、身體的生活が即ち吾々人間生活であるがやうにもある。少くとも、中には、或は大多數は、所詮はさういつたやうなものであると、云はれないでもない。けれども、能く観察し、深く考究して見ると、吾々の生活は、さう簡單なものでは、決してないのである。吾々人間の生存欲は、單なる生存の爲に生存を欲すると云ふやうな、そんなシムブルなものではない。生理生活、肉體生活、生命といふやうなものも、申すまでもなく、吾々人間生活の、欲望中の大事なものである。少くとも、順序としては、或は方法手段としては、先づ、第一に思はぬければならぬものであり、また思はずには居られないものである。あるけれども、之れが吾々人間の生活に於ける、生活と云ふ意味のすべてに於ては、決してない。吾々人間が此世に生存して居り、また生存して行くには、單に肉體的、身體的にと、云ふ外になほ澤山の意味もあり、目的もある。即ち、吾々人間

の生活と云ふものには、また精神的方面もある。吾々の生存は、此の精神的方面をも包含してのものでなくてはならぬのである。この方面を忘却しての人間生活問題は、決して問題にならぬ。人間生活の問題としては、寧ろこの方が、より大切なのである。少くとも、半々に見なければならぬことは、申すまでもないことである。であるからして、生存欲——人間生活に於ける生存欲——は、たとひ、之れが生理的、または歴史的には先きのことであるにしても、今日の、吾々、開化の人間生活に於ては、之れは決して全部のものにあらずして部分的のものである。意味や、目的にあらずして、形式であり、手段である、少くとも、意味や目的の一部分である、眞の意味、眞の目的は、寧ろ心理的、精神的方面にありと云はんければならぬ。即ち、吾々人間の、心理的、精神的方面の欲望は、人間生活に於ける、生存欲の主體であつて、生理的、身體的方面のそれは、寧ろ客體である。と、かう言ひたいくらいである。

かくの如くに見て来ると、吾々人間、殊に進んだところの、吾々人間社會に自殺者の頻出して來ることも、自ら、よく理解せられるやうになつて來るのであり、かたぐ、死は、單に恐るべきものでもなければ、さう厭がるほどのことでもない。と、云ふやうなことも亦能く分つて行くのである。が、併し、世の多くの人々——普通一般の人々——は、死と云ふことを非常に恐れたり、厭がつたりするものであるから、是より章を改めて、生とは、どう云ふものであるか、死とはどう云ふものであるか、生と死との關係は、どうであるかなど、云ふやうなことを、出来るだけ、詳細に述べやうと思ふのである。

### 三、生死の問題

無から有を生ずる。と、云ふことの、あらゆる筈がないのと同じやうに、生、

産まれると云ふことも、只だ、あるものではない。生まれると云ふ原因、産むと云ふ者があり、産まうとする意志があつたればこそ、始めて生産したのである。そして、其の生まれる原因だとか、産まうとする者だとか、意志だとか、云ふやうな、さう云ふものも、矢張り、また、同じく、因果關係の法則、事實の下に出來て居たのである。かやうにして、前から前へと、たどつて行つて、思索に思索を重ねて見ても、顯はれて居るか、潜ひで居るかの別こそあれ、所詮、何等か、さう云ふ、自依、自存の存在が本來にあつて、さうして、このやうに生々、存々を繼續して來て居るのである。と、云ふやうにしか思はれない。若し、強いて、其の自依、自存の存在と云ふもの——大本とか、本體とか、實在とか、稱して居るもの——を余が何とか名づけるとしたならば、欲眞體とでも稱したのである。さうして、吾々人間の、生とか死とか云ふやうなことも、吾々以外の宇宙世界のすべての現象と同じやうに、亦皆この欲眞體の顯潛的起

伏に過ぎないものである。たゞ吾々は、諸種の無生物とは勿論のこと、植物や他の動物とは大に違つて、其の生存中の事實を経験として、自ら知識して居る、或は目的を畫き、或は理想を立て、行つて居る。と云ふのが、吾々人間生活たる所である。さうして、其の生死の現象や變化やなども、これを、極めて冷靜に見ると、物理的、化學的、生理的、乃至は心理的の法則に因つて行はれてあるものだ。と、云はれるのである。あるが、さて、そんな具合に、淡泊に、吾々の、大事の、生死と云ふことを説いて仕舞ふと、云ふやうな、さう云ふやうなことは、餘りに、情のない、そつけないことでもあるが、兎も角も、單に、生きるに云ふことは、さのみ、大して、やかましく、云ふほどの問題でないにしても、死ぬると云ふこと、人生の最期と云ふことになつては、これは、決して輕々に論じ去るべきものではない。で、今、少しく、詳細にこれを考察して見やうと思ふ。

所謂、吾々人間は、老少、不定で、誰でも彼でも、何時、何時、何處でこの死と云ふことに遭遇するかも知れぬ。死の神は、若いからとて決して容赦はせぬ。生れて間もなく死ぬ者さへある。花の盛りの、紅顔の美少年を、無常の嵐に襲はれることもある。それは、必ずしも病死と云ふことにのみ限らぬ。天災、地變など、思はぬ出來事の爲に、變死することもあれば、悪い奴の爲に、殺されるやうなこともある。特に、世が文明になり、吾々の物的生活が進んで來ると、進めば進むほど、一方に於ては、却つて危険が多くなり、死の原因が殖えて來る。都に住居してゐる者や、海陸に旅行して居る者などは、何時、何處で、怪我をしたり、災難に遇ふか分らぬ。ともすると、即死するやうな禍害に逢ふかも知れぬ。さう云ふ實例は、決して少くない。ところが、身心に、別に何等、異状のない、普通の人は、誰でも死ぬのはいやである。餘程の場合でなければ、進んで死に赴くの、自殺するの、と、云ふやうなことはない。ないが、



天の命ずるところ、亦如何とも致し方がないから、早晚、免れぬこと、誰も  
が覺悟はして居るもの、實は、常に、何となく不安を感じて居るのである。  
明日とか、明後日とか、豫言がない、よしあつても、なか／＼當らぬから、い  
いもの、若し、これが、前、以て定まつてもあらずものなら、それこそ大  
變である。重傷とか、熱病とかで、人事不省に陥つたり、無意識状態となつた  
りして、そして、次第／＼に眠るが如く死ぬのならば、兎も角、さうでなくて、  
何ともない、達者な時に、君の命は、明日貰ふぞと言はれたら、恐らくは、ど  
んな人でも、多少驚怖の念に打たれることであらう。平素から餘程、修養、鍊  
膽の出来てある者か、白痴、狂人でない限り、先づぎくつと感ずるであらう。  
たとひ、偉人よ、傑士よ、賢哲よ、聖者よと、呼ばれるやうな人でも、全く何  
ともない、誠に平靜であると云ふやうなことは、恐らくは、あり得ないことであ  
らう。理想としては、元よりさうあるべきではあるが、實際に當つては、さ

うは行くまい。

抑々、吾々人間は、老少、貴賤、誰れ彼れの差別はなく、皆、いづれ、一度  
は逝かんければならぬ冥途の旅路に對して、常、平生から、出来るだけの、修  
養をし、鍛鍊をし、覺悟と用意とをして置いて、何日、何時、死の神の手に捕  
へられやうとも、大して狼狽するやうなことなく、更に願うは、全く平靜に瞑  
目するやうにあらしたいものである。『つひにゆく途とはかねて聞きしかど昨日  
今日とは思はざりけり』で、實に、今日は他人の身、明日は我が身の上のこと  
である。お互に、今日が、明日が日も分らぬのである。思へば、吾々、人生は  
洵に無常であり、果敢ないものである。死の問題、豈に容易に決すべきやであ  
る。

實に、生死は、能くは分らぬことである。一體、死と云ふことは、どのやう  
なものであるか、どう云ふ感じや、覺えのするものであるか、そんなことは何ん

とも分らぬのである。誰もさう云ふことは知らぬのである。一度死んで、復た蘇生したやうな人とか、長時間、人事不省に陥つて居た人とかでもあつたなら、或は、多少死と云ふことを味識した。と、云はれるかも知れぬ。ちつとも、さう云ふやうな事に遇つたことのない者とは違つて、幾らか死と云ふ経験をしたと云はれやう。併し、矢張り死んで仕舞つたのではないから、實は、たゞ、かくの如き、無意識状態を経験したと、云ふだけのことである。云はゞ、先づ催眠にかゝつて居たり、或は自然的睡眠をして居つたりしたやうなもので、嚴正なる意味に於ては、決して、死の経験をしたものとは云はれぬ。若し、或は、意識のある間に、立派なる名醫から、さじなげられて、側の看護人や、親戚、知己など、一同にも泣き悲まれて、さては、自分も、もう、これは、所詮、助からぬ、と、充分覺悟をし、そして、何時の間にか、無意識状態に陥つて居て、やがて、身體も冷たくなり、脈搏も少しも無くなつて、終に、全く死んで仕舞

つた。ところが、十時間か、十二三時間も経つてから、何かの拍手で、ふと、息吹きかへして、蘇生し、後、漸くにして意識も充分、明瞭になり、一週間と過ぎ、十日と経つ中には、全く、元との健康體に復した、と、云ふやうな、さう云ふ者が、あつたとすれば、それこそ、眞に、死の経験をした者と云はれやう。けれども、なほ嚴密に言へば、矢張り、さう見るのは誤りであつて、たゞ、無意識状態に居つたことが、深くして長かつた。と、云ふに止まるばかりである。

かくの如くに見て來ると、吾々が、本當に死の経験をすると云ふやうなことは、所詮不可能のことである。吾々には、生れた時の経験がなかつたのと同じやうに、死ぬると云ふことも亦、到底、これを經驗することが出来ないのである。吾々は、たゞ他人の生れた、前後のことや、生れる時のことやなどを見たり、聞いたりして、自分のことも、矢張り、大體、あのやうなものであつたの

であらうと、かう、思つて居るのである。死ぬ時のことや、その前後のことやなども、亦それと同じことで、他人の、その時のことや、前後のことやなどを見たり、聞いたりしては、自分のことも亦、大體、あのやうなものであらうと、かう想像して居るばかりである。

吾々が、吾々人間の死と云ふことについて、知つたり、思つたりすることの出来るのは、先づ、ざつと、この位のことであらう。生理的には、呼吸が止まり、筋肉の活動が止まり、神経の活動、亦止んで、血液の循環も無くなれば、脈搏も亦無くなり、申すまでもなく、五官、内臓等のすべての官機の働きは、全く息止して、次第／＼に手足や、顔や、身體のすべてが、灰色、土色となり、終に、全く冷たい、死體となつて仕舞ふことである。即ち生時に於ける、生理的條件や事實が、全然無くなり、やがては、或は埋められ、或は焼かれなどして、元の四大に復歸して仕舞ふことである。又動物的又は化學的變化も附隨し

て行はれることは勿論である。心理的には、意識が漸次、不明瞭になり、終には全くなくなることである。あるが、決して、有つたものが、全く無くなつて仕舞つたと云ふ譯ではなく、たゞ、連続的又は循環的變化を爲したと云ふことに過ぎない。と、かう、云つたやうなことであらう。

極めて冷静に、科學的、哲學的の見方をすれば、死と云ふことは、大體、右に述べたやうなことであるが、元より人情の上から云へば、決して、さう平氣で居られる筈のものではなく、大に悲しむべきことではあるが、さればと云つて、豫ねてから、これを心配したり、恐れたり、するがものでもなからうかと思ふ。たとひ、憂ひて見た所で、怖がつて見たところで、何の利益もなければ、所詮、餘計なことである。のみならず、かやうな、要もない、心づかひをするのは、反つて、生活に害があり、出なくてもよい病氣が出たりして、態々、死を急ぐやうな結果になるのである。嫌はうが、いやがらうが、何れ、一度は、必

ず遭遇せなければならぬ、已定の事實であるべき以上、須らく、能く覺悟して、徒らに、彼れ是れと、餘計な心配をするものでない。それよりも、寧ろ、或は老莊の虚無恬淡觀を學ぶもよろしければ、禪的悟道を修めて見るもよからう。或は東洋豪傑式の諦めをあやかるのも面白ければ、耶蘇教に歸依するのも結構である。何んでもよいから、要は、自分々々の、根機相當に、安定の法を講ずべきである。「別け登る麓の道は多けれど、同じ雲居の月を見るかな」である。

能く考へて見ると、一體、吾々人間は、元と々々、自分が生れやうと思つて、勝手に生れて來たのでもなければ、又、時節が來れば、否、應なしに死なんければならぬやうに、運命づけられて居るのである。生あれば、又、爰に死あるは、寧ろ當然のことであつて、何も、さう、吾々が、彼れ是れ言ふ權利もなければ、どうするの、かうするのと云ふ權力は、猶更ないのである。あるが、さうかと云つて、全く何も思はずに居る。と、云ふ譯にも行かぬ。そこで、手取

り早くに、一體、吾々、個人個人の、生れるとか、死ぬとか云ふことは、つまりは、例の欲眞體の世界的顯現、潛伏の變化に過ぎないものである。と、かう達觀、概視して仕舞つて、要なき苦勞や心配せぬがよからう。よしや、自分の身體は、死んで、全く無くなるものとしてからが、子となり又、孫となつて、連續的に、生々存々、そして次第々々に發展して行くものである。と、かう思つて見れば、死は、寧ろ、却つて新たなる生であるとも觀られるのではなからうか。更に、況んや、自分の、此の世に生存中、色々に成したる、活動のその跡が、有形的に、或は無形的に、大なり小なり、永く保存して行くものであると、かう、云ふことをも考へたならば、絶對的の死、と、云ふことは、見方によつては、實にこれあるべきものではなく、普通、世の人が思ふやうに、さう悲しむべきものでもなければ、厭ふべきものでもなからう。或は、相當の年齢まで生きてから死ぬのなら、さう云ふ風に考へるのも亦、面白いことであらう

けれども、さうでなくて、若少の身で、急に死なぬければならぬやうなことに  
出遇ふのが厭やだとか、爲したい事が、澤山にある、將來、有望の身でありな  
がら、夭死するやうなことになるのは、洵に悲しむべきことであるとか、云ふ  
やうな者があらう。あらうが、併し、それは、餘り、通り一遍の、甚だ淺薄な  
考へであるのである。たとひ、二十で死なうと、五十で死なうと、又、八十に  
なつて死なうと、死は即ち死で、死に、何等異なるところはないのである。年  
若かで死ぬのだから惜しいの、年老いてから死ぬのだから惜しくないのと、云  
ふやうなことは、それはこれから以後に於て、此の世の中に居て、此の世の爲  
に成すべきことが少くあるか、澤山あるかの、功利的の見方であつて、死と云  
ふことに對して、各自々々の、心理的見方としては、甚だ透徹しないものであ  
る。意識ある生存中は、二十年生きて居つても、三十年生きて居つても、又、  
四十年生きて居つても、何十年生きて居つても、吾々の、生の欲望に限りのな

いことは同じである。幾つ幾つまで生きて來たから眞にもう、これで、死んで  
もよい。と云ふやうなことは、普通の場合に於ては決して、有るものでない。  
側の見る目では、若い者の死ぬのと、年寄りの死ぬのとは、大に違ふやうにあ  
るかも知れぬが、死んで行く、當の、本人に於ては、若いも年寄りも無いこと  
である。今、いよ／＼息を引き取るとか、全く無意識の状態になるとか、云ふ  
までは、誰でも、朦朧なりにも、大なり、小なり、必ずや、何等かの欲望を有  
し、意志を持つて居るものである。事によつたら、或は明晰なる、確乎とした  
目的を畫きつゝあることもあらう。つまり、かうしたものが、即ち、人生の人  
生たるところで、決して老少の差別はないのである。

或は、若し、死、其のものは、どうでもよい。けれども、死ぬる時の、其の  
時の苦痛や、もがき、又は死に當つての、いよ／＼の死の豫想や、生の愛惜の  
念やなどが、達者で居る、今から思はれて、恐ろしい、心配である。と、かう

云ふ人もあるかも知れぬが、それには、上來、くどいほど述べ來つた所を、能く了解し、諦悟すればよろしく、又、今一つは、いよいよ、死ぬ時の形貌だとか、動作だとか、全體としての有様だとか、云ふやうなものは、傍で見て居る者の目にこそ、如何にも苦しうに想はれるけれども、當の、本人の方では、何等意識することもなければ、苦痛も、何も無いのである。苦痛だの何だの、と思つて居るやうでは、まだ、それは病氣で居る時のことで、今死なうとする時や、死ではない。死は、即ちどこまでも、正に嚴密なる無意識状態なのである。涅槃である、極樂である。と云ふことを、能く徹底的に了解し體得したらよからう。果して、能く、さうしたならば、餘計な心配や、恐怖は自然となくなつて行くであらう。そして、遂には、能く、全く死の念を超脱した、悟道生活をする事が出来るやうになるのであらう。

かやうにして、吾々は、死なぬ間、苟も意識ある中は、絶えず、彼れよ、是れよと、目的を有し、希望を畫き、理想を標榜して、あくまでも、努力し、奮闘し、死後の毀譽、褒貶までも思つて、出来るだけ、此の世の生を満足せしめるやうにしたりよからう。眞に能く、かゝる、眞面目なる、現世的生活を實現し行くハであつたならば、どうして、超經驗的のものである所の、死だとか死後のことだとか、云ふやうな、さう云ふことを考へたり、想つたりして、居るやうな暇があらう。吾々は、須らく、此の世に於ける、生のベストを盡すべきである。人生は、たい、それ、これで充分である。

これを要するに、生とか、死とか云ふことも、畢竟、吾々の意識内事に止まることである。意識の無いところには生もなければ、亦死もないのである。即ち生、または死に於ける、すべての出來事、すべての苦樂は、擧げて、皆、吾が自己意識内事である。今の人生に對して、悲觀、厭世の觀じかたをするのも、樂觀、祝福の觀じかたをするのも、所詮、自己意識の、領域内に在るのである。

自己の思ひやうによつて、どうにでもなるのである。

#### 四、苦樂と幸不幸

見方によつては、吾々人生問題のすべては、それが苦痛なことであるか、快樂なことであるか、それが幸福なことであるか、不幸なことであるか、と云ふことによつて解決され、處置されるものであるとも云ひ得る。吾々人間の動作、行爲のすべては、之れが意識的のものであると、無意識的のものであるとに拘はらず、本能的のものたると、有意的のものたるとを問はず、それが、或は、其時に於て、苦か樂かの衝動、刺激によつて左右されつゝあるものであること、或は、今は、ともかく、將來に於て、苦を招致すべきや、樂を招致すべきやによつて左右されつゝあるものであることは、正に、否定すべからざる事實であ

る。身體的には、痛いとか、痒いとか、だるいとか、重いとか、寒いとか、暑いとか、辛いとか、にがいとか、飢えたとか、渴いたとか、云ふやうなことは、すべて苦痛を覺えるものである。それに反して、滑かであるとか、柔かであるとか、涼しいとか、暖かいとか、甘いとか、云ふやうなことは、すべて快感を覺えるものである。即ち、それが、一時的性質のものたると、永久的性質のものたるとを問はず、吾々の生理條件に適應するものはすべて快感を覺え、これに反するものは、すべて苦痛を覺ゆることになつて居る。そして、吾々は、前者は、進んで之を迎へ、後者は、退いて之を免れやうとするものである。また、精神的には、面白くないとか、憎いとか、恥かしいとか、口惜しいとか、哀しいとか、痛はしいとか、恐しいとか、云ふやうなことは、すべて苦痛を覺えるものであるが、之れに反して、面白いとか、可愛いとか、悦ばしいとか、嬉しいとか、誇りを感じるとか、満足に思ふとか、希望にもえるとか、云ふやうな

ことは、すべて快感を覚えるものである。即ちそれが、一時的性質のものであると、永久的性質のものであるとに拘らず、吾々の心理條件に適應するものは、すべて快感を覚え、これに反するものは、すべて苦痛を覚えることになつて居る。そして、吾々は、前者は進んで之を迎へ、後者は退いて之を免れやうとするものである。これは、吾々人間の、普通の事實である。

あるが、苦とか、樂とか、云ふことは、たゞ、客觀的にのみ、かう云ふものである。と、定めて仕舞はなければならぬほどに、さう融通のつかぬものではない。一體、吾々が、苦しいとか、樂しいとか思ふことは、實は相對的のものであつて、假りに、樂しいことばかりであるとしたならば、その樂しいと云ふことは、全く感ぜられないで、結局は、樂しいと云ふことが無いのと同じことになる譯である。「樂は苦の種、苦は樂の種」と、云ふことが、我が國の俚諺にあるが、洵に、能く此の間の心理を言ひ現はして居る。よしや、向うの方、相

手かたが、絶えず、我れに對して快樂をのみ與へる物で居てくれるし、事相に出來て居てくれるとしてからが、當の吾々自らの方が、身體的、生理的には勿論のと、精神的、心理的にも、何時も、丁度いゝ具合に、ひとり手が手に、和調、統制されて居てくれるものではない。物と云ふものは決して、さう、靜的に在るものでもなければ、行つて居るものでもない。吾々人間のこと、亦さうである。生理的にも、心理的にも、身體的にも、精神的にも、不斷に變化、推移して居るものである。中でも、吾々の、氣分とか、感情とか、云ふ者は、それが激しいのである。であるから、寧ろ、吾々は、吾々の心の方から定めてかゝらなければならぬのである。外界の事物が如何様にあらうとも、生理や、身體が何んであらうとも、自分の心を、ちやんと、能く調節、統制して行くことさへ出來れば、人生に於けるすべての事、さう苦しいものではない。樂しい時だからとて、決して、さう調子に乗つて、はしやぐやうなこともしなければ、代り



に、苦しい時だからとて、さう惱んだり、悲しんだりすることもせぬ。楽しく、思ふ時には、これは、苦しく、厭やな思ひをした、その御蔭であると、かう慎み、また苦しい、厭やな思ひのする時には、今にまた楽しい、快い時が出て来るものと、かう諦めて置く。と、云ふやうな具合に、自分で、自分の心持ちを舵とつて行くのである。吾々の心と云ふものは、幸に、自分の考へやう、思ひやうで、どうにでも、なつて行くやうに出来て居るもので、他の、自然界の事實や、植物界や、動物界のやうに、單に期成原因にのみによつて、左右せられて行くものではなうて、自意識や、自覺で、或は目的を立てたり、或は理想を畫いたりして、どうにでも、自分で自分の生活の状態を變化さし、方向を規定して行くことが出来るのである。即ち、吾々人間生活には、大に自由が出来るのである。たゞ現實にのみ生きないで、理想、あこがれの世界に生きることをさへ出来るのである。であればこそ、吾々は、能く、忙中、閑を得、苦中、

樂を味はふことが出来るのである。たゞ、吾々にのみ與へられたる、此の特權をより多く發展さし、活用して行くことを努めんければならぬのである。

苦とか、樂とか、快とか、不快とか、云ふものは、かくの如くに、決して靜的のものではなく、極めて、動的のものであるが、幸福とか、不幸とか、云ふことは、其の意義、性質が、單なる苦樂や、快、不快とは、大に異なつて居るものであり、其の、當の本人、各自の品性、習慣等に因ること、極めて多大なるものがあるのであるから、それだけ、猶更、吾々の心理的自由、道德的自由、哲學的自由乃至は宗教的自由、——一言にしては精神的自由——が多いのである。あるが、世間一般の人は、其の所謂幸福と云ふこと、眞の幸福と云ふこととの間には、大なる考への相違、意味の深淺がある。と、云ふことを知らぬやうであるから、是より、章を改め節を重ねて之を説述することにしやう。

よく人は言ふ、あの人は仕合せである、運のよい人である、羨ましいことで

あるなど、併しながら、其の仕合せとか、幸福とか云ふことが、果して、どう云ふものであるか、さう、單純に、是れぞと定めることは出来ぬ。それが、たゞ、一時的の、快樂とか、享樂とか、云ふやうなことになるば、何んでもないことであるけれども、苟も、それが、吾々人間生活の、幸福と云ふことになること、餘程、よく考察もし、研究もせんければならぬ。なか／＼、さう、やす／＼と分るものではない。たゞ、毎日々々、遊んでばかり居て、何等仕事をせず、食ひたいと思ふ物を食ひ、飲みたいと思ふ物を飲み、着たいと思ふ物を着、住みたいと思ふ家に住み、見たいと思ふ物は何時でも見られる、聞きたいと思ふことは何時でも聞かれる、行きたいと思へば何處へでも行かれる、したいと思ふことは何んでも出来る。と云ふやうな境涯や、身分であつたなら、さぞ愉快であらう、幸福であらう。と、かう考へる者もある。あるが、さて、さう云ふやうなことが、實際能く出来得ることであらうか、よしや、假りに、さう云ふ

ことが、事實出来ること、してからが、たゞ、それで、果して、眞に幸福であるであらうか。さうは、なか／＼言はれぬのである。

寧ろ、それよりも、常に、何か、自分の能力相當な仕事をしては、適度に休息したり、或は、困難を侵して努力した結果、何ものか、自分の欲望した物を獲得したりするとか、云ふところにそこに、眞の愉快があり、本當に幸福が味はれるのである。尤も、全く望みのない、初めから絶望と、云つたやうな境遇に置かれる。と云ふやうな、さう云ふことが、若しありとすれば、それは、元より苦痛であり、不幸であると云はんければならぬ。けれども、吾々、人間がさう云ふ、絶對的苦痛の境地に、終始して置かれると云ふやうなことは、生理的にも、心理的にも、決して有るべきことでない。が、さうかと言つて、丁度、いゝ鹽梅に、具合の善い程な處に、自然に、始めから終りまで置かれると云ふやうなことも、亦、全くあるものでない。然るに、一體、吾々人間と云ふ者は、

欲に限りのない者に生れさゝれて居るものであつて、初め、欲しがつたところの、何物か得られなかつた時には、それは、非常に欲しがつたものであるが、さて、已にそれが得られて見ると云ふと、さほど喜びもせぬものであり、時間の経つに従ひ、次第に忘れて仕舞ふやうになり、いよいよ慣れて、いよいよ何とも思はぬやうになり、ともすると、反つてそれを厭やがるやうになるやうなことさへあり、少くとも、更に、それ以上のもの、または、全く他のものを欲しがるやうになるやうなこともある。と、云つたやうな具合で、吾々人間の欲情又は意欲は、新また新を追うて出来て行くものであつて、決して靜的に、丁度、い、鹽梅に満足の出来るやうになつて居るものではないのである。相互に、他人から見られるときには、非常に羨ましがられる程の物事でも、それが、當の本人には、別に何ともなく、愉快とも幸福とも思つて居ないで、反つて、他の人々の物を欲しがつたり、事を羨ましがつたりして、人知れず、

やと、罪を作つて居る。と云ふやうなこともあるのである。そして、かう云ふ随分うなことは、たゞ食、衣、住のやうな事ばかりでなく、人事百般、何、彼について、皆さうである。財産のことについても、さうであれば、生命のことについてもさうであり、名譽のことについても、さうであれば、權勢のことについてもさうである。他人が思つて居るやうな具合に、本人自身は、決して思つて居ないのである。満足もして居なければ、安心もしてゐるのではない。羨ましがられて居る者よりも、羨ましがつて居る者の方が、實は、反つて、平和であり、仕合せであるかも知れぬ。

極めて大體に於ては、吾々人間は、共通した欲情を有し、意向をもつて居るものである。けれども、之を嚴密に考へて見れば、千萬人が千萬人ながら異なつて居つて、其の程度や量に於ては勿論のこと、質に於ても亦さうである。それが、全く同じいと云ふやうなことは、斷じてない。二人としてあるものでな

い。これを、身體的、生理的に見ても、心理的、精神的に見ても、それらが、丁度、二人相同じいと云ふやうなことは斷じてない。其の、天より稟けたるところの、體質、性格等の生成、發達、活動等が、時、處、位の三つ、及びそれらの關係の上に於て、種々相異なるべきは、火を見るよりも明かなことであり、已に、それらが相同じからざる以上、其の知、情、意の程度、性質、發現等に千様萬態の差別あるべきことは、亦當然のことである。であればこそ、彼の人は、實に仕合せである、羨ましいことであるなど、自分の方では思つても、向うでは、決して、さう思つて居ず、反つて、こちらの方を幸福だと思ひ、羨ましがつて居る。と云ふやうなことがあるのである。

かやうな譯であるから、吾々人間は、相互に、彼れが幸福で、自分が不幸であるとか、自分が幸福で、彼れが不幸であるとか云ふやうな風に、幸、不幸を自己の忖度で評定することは出來ぬ。況んや、目で見たり、耳で聞いたりする、

物事の如何にのみよつて、さう云ふ物事の、數量的關係や比率や何かで、他の幸、不幸や、自他の幸不幸やを評定するなどのことは、それは以ての外の誤りである。さう云ふやうなことは、所詮不可能のことである。更に、況んや、量的に、共通的に、吾々、人間の幸、不幸を定めやうなんて云ふことは、無謀極まることである。寧ろ滑稽のことである。吾々は、たゞ、かう云ふことは出来る。主觀的、抽象的に、或る標準を立てることは出来る。即ち、吾々人間の、欲情や意欲は、到底、際限のないものであり、而も、一面に於ては、習慣と云ふことがあつて、同様の状態が、長く繼續すると、快樂も快樂でなくなり、苦痛も苦痛でなくなる、そして、かう云ふ標準によつて、吾々、各自の、それ々の幸、不幸の増減、進退を窺ひ知ること位は出来る。

外界の事物や、環境は、吾々人間の、内的衝動や、欲情や、意志に、何時でも、丁度、適應するやうには出來て居ぬ。さう詭へ向きに、うまくは行つて居

らぬ。寧ろ、其の反對に、不本意に出来て居るのではなからうかと思はれる位である。第一、吾々自身の、身體なり、精神なりが、随分と不完全であり、不十分である。内外共に、かやうな状態に於て在るものであるから、とても、さう満足に幸福な生活を送ることが、出来る筈のものでない。それにも拘はらず、本來、吾々は、醜を得て蜀を望むと、云つた風な、横着者であるから、到底事實的に、これで、真に満足だと云ふ境地に永住することは出来ぬ。たゞ、吾々は、主觀の世界に於てのみ、能く其の性情、心意を調節し、鹽梅し、統制し、思想の上に於て、人生の幸福を味識し、精神的充足を祈願するより外に道はないと思ふ。

さて、然らば、どうして、吾々は、能く、生命欲や、富貴欲や、名譽欲や、權勢欲や、其の他、色々な欲望や、嗜好などを、いゝ具合に調節し、鹽梅し、統制することが出来るか。果して、能く、さう云ふことが出来れば、それこそ

實に結構なことであり、幸福なことである。あるが、元より、それは、なかなか、容易などでは行かぬ。けれども、吾々の心理の作用や活動は、それが積極的のものであらうと、消極的のものであらうと、大體に於ては、必ずや、正に、知と情と意との、その何れかの形式を取つて現はれるか、或は、それ等相互の、關係的作用、活動をなすものであるから、能く、その邊の、筋道を辿つて行き、心理の要諦を得るやうにしたならば、必ずしも、さう、困難なことではなからう。吾々の心的現象、意識活動のすべては、此等の一、若くは二以上の、單純作用か、相互作用かによつて顯現するのである。欲しいとか、惜しいとか、かうあらしたいとか、さうあらしたくないとか、云ふやうなことなどは、すべて情意の活きであつて、知は單に、その案内、又は、助手たるに止まるのである。長生きしたいとか、金が欲しいとか、名譽が欲しいとか、權勢を得たいとか云ふやうな欲情や、若死にしたくないとか、貧乏したくないとか、恥辱を

蒙りたくないとか、勢力を落したくないとか、云ふやうな、欲情やなど、積極的若くは消極的欲望の、それ等は、畢竟、皆、この、廣義に於ける、知情意の作用、活動たるに過ぎないのである。で、能く、此の三種の心理作用や、活動やの、因つて起るところの、其の本源や、経路を知悉して、そして、それ等の調節、鹽梅、統制を能くすることが出来たならば、爰に、はじめて、かゝる難問題も自ら氷解することが出来、亦随つて、遂に、人生の眞の幸福を味識し、體驗することが出来るであらう。

かう考へて來ると、それには、學ぶと、考へると、鍊るとの、この三つの方法が必要になつて來る。吾々の、宇宙や世界やについての知識、人間についての考へなどが、明瞭になり、徹底しさへすれば、吾々の欲望や行動やは、自然と立派になるであらう。たゞ學んで、考へただけでは、まだ足らぬ。その上に、能く情意を鍊り、志操を磨いたならば、則ち吾々の人格は、自ら高尚になるで

あらう。聖人と呼ばれ、神と稱せられるやうな人々は、正に此の種の人々なのである。さう云ふ人々は、或は、生れながらにして、元より、多少、非凡なところがあり、賢明なところがあつたでもあらうが、併し、又、尙ほ、其の上に學問もし、思考もし、鍛鍊もしたのである。尤も、此の知識と云ふのは、單に科學的のもの、みを指して云ふのではなく、また、倫理的、哲學的、宗教的のものでもなくてはならぬ。つまり、吾々、人間の、精神的な生活、靈的生活の方面に關しての知者、覺者、菩薩となるに必要なものでなくてはならぬ。さう云ふ方面の、思考の研鑽や、精神の修養や、意志の鍛鍊でなくてはならぬ。と云つて、吾々の性質は、千萬人が千萬人ながら、各自、それ／＼相異つて居るものであるから、誰もが、皆釋迦や、孔子や、基督や、ソークラテスのやうにさう云ふ、道徳的、宗教的、哲學的趣味をもつて居り、さう云ふ精神生活の方面にのみ向つて行きたがるものとは、決して云はれぬ。寧ろ、物質的、世俗的

方面に、趣味をもち傾向を有して居る者が非常に多い、大抵の人は、皆さうである。それは、決して怪むに足らぬことで、或はそれが今日の人間の、本當のところであるかも知らぬ。少くとも、さう云ふのが、吾々人間の、人間たる一方面であらう。さう云ふことが、悪いとは、決して言はぬ。言はぬが、而も、さうばかりでは、吾々が人間としての、眞の満足は出来ぬ。幸福なる人生を終始することは出来ぬ。矢張り、大なり、小なり、神性的、佛性的方面の生活をもせずには居られぬ。そこが、又、吾々人間の、人間たるところで、他の動物と異なる、最も重なる點である。要は、たゞさう云ふ人間性、——神と猿との間に在る所の人間性——のそれを、各自、天より稟けた、器、相當、分、相當に、發揮さすことを勉むればよいのである。神へ神へと、不斷の精神、向上に努力して行かうとする所に、其處に、眞の人生の意味があるのである。そして、そうするには、どうしても、宇宙や、世界や、人間についての知識を充分

に得て行くことに勉めんければならぬ。特に人事についての睿智を研ぎ徳を養ふことに努めんければならぬ。果して、能く、眞に賢明の人となることが出来たならば、則ち、其の情は、自ら高尚に、意は自ら剛毅に養成せられて、勝手に極まる毀譽褒貶、限りなき衝動、欲望のたゞ中に居て、能く泰然として、眞に幸福なる人生生活を送ることが出来るであらう。即ち最も賢い人は、亦最も幸福なる人であると、云ふことが出来るであらう。爰に於てか、余は轉た、ソークラテスの福德合一説を讚美し、『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』と、言つた孔夫子を仰慕せずには居られない。

## 五、善 惡

吾々の、日常生活に於て、善いとか悪いとか、云ふことを、日に幾度言ふか、

殆んど、數へも切れないほどであらうと思ふ。それが、必ずしも、道徳的の意  
味ではないにしても、所謂上方の發音でならば、これはよい、これはわるい、  
と言ひ、東京言葉でならば、これはいゝ、これはわるい、と言ふことは、物に  
ふれ、事に當つて、吾々の口をついて出て居ることである。たとへば、此の魚  
はいゝとか、わるいとか、或は、味噌汁の方はいゝが、醤油汁はいかぬとか、  
云ふやうな、飲食物についての事をはじめとし、此の缺はいゝとか、わるいと  
か、或は、紙はいかぬ、クロスの方がいゝとか、云ふやうな用具や、用材のこ  
とに至るまで、日々の暮しに於て、善い悪いの判断、批評、の、如何に多いこ  
とであるかは、實に驚くばかりであらうと思ふ。今、かう改めて言はれて、は  
じめて、氣の付く人は、試に、朝、起きてから、夜、寝るまでの、其の日、一  
日の、自分の用ゐるその度数や、家族、全體が用ゐる、その度数やを記帳して  
見たらば分る。若し、熱心に、一箇月の分を、もれなく記載し、通計すること

が出来たならば、自分一人の分だけが、優に一千を超ゆるであらう。假りに、  
八人の家族としたならば、それが一萬に達するであらう。

食うに當つて、此の魚が善いとか、味噌汁の方が善いとか、云ふことは、そ  
れは、吾々、之れを食う者の嗜好、欲望に適ふとか、その甘味が、食う者の味  
覺感情を満足せしむるとか、云ふことである。この缺が善いとか、クロスの方  
が善いとか、云ふことは、これは、吾々、それを使用する者の、その目的に對  
して、それが、より多く、或は最も多く效能があるとか、より能く適合すると  
か、最も能く適合するとか、云ふことである。即ち、吾々使用者の意欲を充足  
さし、感情を満足せしめる、と云ふことである。これを、衣服のことに見ても、  
家屋のことに見ても、亦さうである。道路のこと、乗物のこと、通信のこと、  
運搬のこと、其の他、何のことについて見ても、皆同じことである。若し、夫  
れ、道徳的の意味に於ての、善とか悪とか、云ふことは、果して、どう云ふも



のであるか。

誰が何とか言つた、そのことは悪いとか、善いとか、誰が何とかした、そのことは善いとか、悪いとか、云ふやうな、批評とか、判断とか、云ふことは、即ち道徳上のことである。況んや、更に、その言行について、これを非難、攻撃するとか、賞賛、感謝するとか、云ふやうなことの、道徳的であるのは、申すまでもないことである。吾々人間の世界には、他の動物界に於ては、決して見ぬところの、道徳的批判や、制裁やが行はれて居る。そして、さう云ふ客観的の、それに對しては、義務の念だとか、責任觀念だとか、云ふやうな心理が、吾々の主観の世界には、行はれて居る。或は羞恥、或は恐怖、或は同情、或は崇敬、或は満足、と、云ふやうな、心理が、吾々の内界には行はれて居る。一口に言へば、人性が動き、良心が活らいて居る。果して然らば、さう云ふ、吾の、善惡の判断とか、云ふものは、何によつて、これをして居るのであるか。

即ち、善とか、惡とか、云ふものは、それは何であるか。良心と云ふものは、どんなものであるか。これ等は、吾々人生生活にとつて、極めて大事のことであり、而も亦、最も困難な問題ではあるが、是よりは、大略ながら、それが説明を試みることにしやう。

物の、重い軽いを計るには、衡器を使用すれば分る。物の、長い短いを知るには尺器を使用すればよい。一寸とした物を計るには、一貫目衡とか、一尺指しとかあり、大した物を計るには、十貫目衡とか、二十貫目衡とか、一間指しとか、一丈指しとかある。大概の見當ならば、吾々の目の子算でも付く。けれども、愈々精確になれば、さう云ふ標準によつて計算することが出来て、幾何尺の長短にても、幾何貫の輕重にても、其の比較、差異を明瞭に知ることが出来る。心の中や、目の子算では、不確かであるとか、分らぬ時には、さう云ふ器械でもつて、すぐ、正確、分明に知ることが出来る。即ち、主観的に行

かぬ時には客観的にやる事が出来る。客観的に出来るから、萬人が萬人ながら、同様に判知し、承認することが出来る。所が、それが、道德上のことになると、さうは行かぬ。甲の善いと思ふところ、乙の善いと思ふところ、同じく善いと、思ふにしてからが、それが、丁度、同程度に在ると、云ふことは、なか／＼分るものでない。共に、ちよつと善いと思ふ、大變善いと思ふ、としてからが、そのちよつとに、ちよつとの差異があり、大變に、大變な差異がないとも限らぬ。そこらの精確なことになると、到底明瞭に分るものでない。それと云ふのも、何等客観的に、これを比較し、これを計量することが、充分に出来ぬからである。そののみならず、若し、同一行為に對して、甲は、これを善なりとし、乙は、これを悪なりとした場合には、果して、何れを、眞に是とし、何れを、眞に非とするかと、云ふことは、甚だ、甚だ困難なことである。必ずしも、皆が皆までさうであるとは、決して言はぬが、どちらを、どうとき

つぱりと判定することが、至つてむづかしく、到底出来ぬと、云ふやうなことも、亦決して少くはないのである。即ち、單に量にのみ於て、判然と、比較的にこれを知ることの困難なるのみならず、亦その質に於ても、これを判然と辨別することが、極めて困難であると云はんければならぬのである。であるから、萬人が萬人ながら、善は善と判断し、悪は悪と判断するとか、或は、同一判断にしてからが、同等の程度に於て判断するとか、云ふやうなことは、それはとても出来ることではない。即ち、道德上のことは、これが判断、認知は、畢竟、主観的のことであると云はざるを得ないのである。客観的には、或は、其の國家や、その社會やに於ける所の、其時代々々の、情調とか、或は歴史的、傳習的の、風俗とか、習慣とか、云ふやうなもの、極めて茫漠とした、一般のものが、たゞ何とはなしに、比較的、共通的に、存在して居ると云へやう。が、これとても、精密に考察すれば、決して當てになるものでなくて、之を、客観

的標準として認めるには、餘りに捕捉しがたい、動的のものであると云はざるを得ない。かう見て來ると、一體、吾々人間の、道德といふものには、何等の據りどころもなく、また何等の共通點もなく、たゞ各自が思ひ／＼に善だとか、悪だとか、云つて騒いで居るのに過ぎないやうに聞こえる。けれども、決して、さうではない。たとへば、他人の物を盗み取ることは悪いことであるとか、他人の困窮して居るのを救ふてやることは善いことであるとか、云ふやうなことは、何れの國、社會の者も、何時の世の人でも、誰でも、同様に認めて居る。私心を挿まず、自己の利害を顧みずして、専ら道理に基づき良心に訴へて、正義を踏み行ふと云ふことは善であつて、これに反して、道理も人情もかまはないで、たゞもう、自己の私欲をのみ遂げると、云ふやうな行ひは、それは悪いと思ふのは、萬人が萬人ながら同様である。かう、云ふやうに、極めて、大體に、これを見、全く抽象的に、これを見ると、先づ善惡ともに、ちやんと分つて

居り、定まつて居る。居るやうであるが、さて、尙ほ、これを、仔細に考察して行き、嚴密に研究して見ると、小さな點に於ては勿論のこと、相當に、大きな點に於ても、亦容易に、判然たる尺度標準のあるところを認めることは出来ないのである。同じく、國に盡す、社會に奉仕する、としてからが、何を、どうして、と云ふことになる、其の時、其の場合、其の人によつて、それ／＼に相同じからざることを選擇し、異なる方法を取らぬければならぬ。決して、一體一樣には行かぬ。そして、其の各々の行爲に對して、正當に、これを判斷し、これを評價することは、なか／＼容易のことではない。さう云ふ場合に於ての、判斷評價が分明に、また共通的に行はれること、恰も物の、長短が、物指しによつて計られ、輕重が秤りによつて量られるがやうにある。と、云ふやうなことは、到底、望まれぬことである。嚴密に言へば、或は、それに、萬人が萬人ながら、多少の相異があるべきであると云はんければなるまい。のみな

らず、事によつたら、甲は、これを是とし、乙はこれを非とするやうなことがないとも限らぬ。そして、そう云ふ批判の相異が生じた場合に當つて、これを裁判することは、また同じく困難なことである。これぞと、據るところの、客観的標準がないからである。

右のやうな、具體的のことや、細かいことの、善惡の標準とか、尺度とか、云ふことは、暫らく別として、さて、其の、極めて、抽象的、概念的な、所謂、原理、原則のやうなものに就いては、昔から、今に至るまで東西、異論、百出である。倫理學史を通讀しても分るやうに、説の、餘りに多いのに、先づ一驚を喫せしめられるのである。あるが、それよりも、其の異説の、根本的に相背反して居るもの、少くないことには、實に、多岐亡羊たゞ茫然たらしめられるの、憾みに逢着せずには居られない。が、併し、それが大同、小異によつて、極々、大體に分類すると、結局數種に止まることになるのである。今、其

の中で、重要なものと思はれるもの、四五を擧げて、これが批評を試みることにしよう。

それが、快樂であること、或は快樂が得られる方法であることは、善であること、から云ふやうな説が、極めて古い昔から、唱へられた所である。けれども、若し、吾々が、個人各自に、何時にても、何處で、も、さう、快樂のみを感受して行けるやうに、生れつかされて居ればよいのであるけれども、さうは行つて居らぬ。生理的にも、また心理的にも、缺陷があり、故障があり、矛盾があり、停滯があり、且つは、欲にきりがない爲に、満足だけで續いて行けるやうになつて居らぬものである。寧ろ樂は、苦との相對的存在のものであり、苦のない快樂を味識して行かうと、云ふことは根本的の誤りである。故に、單に、これ等の點から見ても、この説のつまらぬものであることは明かである。加ふるに、吾々人間の生活は、事實に於て、はじめから、それが快樂の物である、

快樂の事であるからとて、向うの事物の方に、定まつた、與へられた性質があつて、それ故に、それを欲望し、それに向つて活動して行く。と、云ふのはなくて、寧ろ、その反對に、吾々各自に、自己が欲望すればこそ、それで、それを獲得すること、そのことを成就すること、若しくは、その成功に進み行く道程が愉快に感ぜられるのである。たゞ吾々は、吾々の性格のまに、意欲し、活動すること、それ自らが、愉快であるのである、と云ふこともある、心理上の事實、を全く忘れて居る説であるから取るに足らぬ。更に、加ふるに、一體、道徳とか、善惡とか、云ふことは、對他的のものである、少くとも、對他的の方面のあることをも、忘れてはならぬ。ところが、この説に従つて、自己の快樂を善とするところから、推して他人に快樂を得さしめることを、善と思ひ、彼れに善を施さうとして、彼れが快樂と思ふなるべしと、自己の思ふ物事を以て、彼れに對するとせよ、若し、幸に彼れが、自己と同じやうに思つて

くれ、ばよいが、さう思はなかつたならば、自己のその行爲は、何にもならぬことになる。況んや、若し不幸にして、それが全く當てがはずれて、彼れの不快とするところであつたならば、その結果は、反つて惡を行つたと云ふことになる。と、云ふのは、吾々が、何を快とし、何を不快とし、何を欲し、何を欲せざるかは、全く、其の人各自の、天性又は習慣等に因るものであるからである。その他、なほ數へ來つたならば、缺點は幾らもあるが、先づ、以上二三の根本的な、若くは重大な缺點があるだけでも此の説は取ることが出來ぬ。

前説と反對に、たゞ、克己、制欲をして行くことが、それが、善であると言ふ説がある。これもまた、古くから唱へられて來たものである。克己説又は嚴肅説などと言はれてゐる。この説の取るに足らぬものであるとは。前説よりもひどいのであるが、ともかくも、其の二三の缺點を述べて見ることにしやう。第一に、目的と方法とを取違へてゐる、少くとも混がらしてゐる。吾々人間は、

單に克己と云ふこと、それ自身をその目的と思ひ、さう云ふやうな、嚴肅一方な、極端な制欲のみを、眞に、幸福な生活、立派な人生と、心得て居るものは一人もあるまい。若したまに、これ有りとなれば、それは、寧ろ變體心理學の材料とし、取扱はるべきもので、人間並のものではない。かくの如く、已に、これを目的としても居らず、又、目的とすべきものでないとしたならば、これを、吾人人生を律する大事の道德的標準とすることの出来ないのは、申すまでもないことである。元と、吾々人間は、有理想的の動的であつて、不完全なる生活より、完全なる生活に向上發展して行かうとするものである。爲に、或は、一時、又は一部の缺陷を堪へ、或は一時、又は一部の快樂を損失するとも、全體又は永遠の快樂——即ち幸福——を得やうと努めるものである。であるから、そこで、斯かる、克己とか、禁欲とか、苦行とか、云ふやうなことが、吾人人間生活の中に生じて來たのである。即ち、幸福なる生活、又は完全なる生

活と、いふやうな、人生の目的に對して、正に取るべき最善の態度方法と思惟して、これを立てたのである。それ故に、若しそれが、かゝる目的に對して、取るべき、適善なる態度、方法でないと、かう思ふやうになり、又は思ふ者があるときは、勿論これを中止、若くは不採用とするに至るべきは、理の然らしむるところである。而も、吾々、人生生活の進展又は向上の爲に、吾々の、以て取るべき方法、又は條件は、他にも、幾らもあつて、克己制欲は、必ずしも、その唯一の方法でないことは、殆ど説明を要せないほどである。どうして、さう云ふものを以て、善惡の判斷に於ける、究竟の標準とすることが出來やう。次に自利說について考へて見やう。が、この說の、取るに足らぬことは、前二者に比べて、更に一層甚しいものがある。と、云ふのは、一體、吾々人間が、道德とか、不道德とか、云ふのは、初めより、對他を意味して居り、他人に對して、不利なることをせぬ、有利なことをする。と云ふやうなことを意味して居

るのである。然るに、單に自分をのみ利するのを以て目的とし、善惡の標準とする。と、云ふやうなことでは、全然矛盾し、兩立しないことであつて、で、問題にならぬことである。が、假りに、自利と云ふことが、それだけで、目的になり、標準になるとしてからが、その、果して、何が己を利するものなるか、眞に己を益するものは何であるか、と云ふことは容易に分るものではない。利と不利とを、よく分別するには、そこに、これを判断する賢明なる智慧と、それによつて、照らし合はされる標準、即ち、快とか、不快とか、幸とか、不幸とか、眞我の満足とか、何とか云ふ、根本的な、或は究竟的なものがないければならぬ。それでは、これを以て、究竟的、目的的な、善惡判断の標準とするに足りないことは、自明のこと、なるのである。況んや、吾々人間のことは、何事にせよ、己を利するには、己も、亦他人を利することを、せぬければ行かぬ。たゞ、全く自分をのみ利する、と、云ふやうなことは事實に於て、

到底、出来もせず、よし、又出来るとしてからが、さう云ふやうな考へでのみ、行動、云爲して行くと云ふことになれば、必ずや、正に他人から排斥され、反對されて、結局は、事、志と違つて、反つて、不利益を招致すると、云ふことになり、當初の目的とは、全く背反した結果を受けぬければならぬことになる。のみならず、若し、果して、實際に於て、吾々人間が、かくの如く、互に、單に自分をのみ利しようとする努力すれば、其の爲には、自ら、他人を不利益に陥らしめることは、毫もかまはぬと云ふことになり、世は、我利と我利との衝突ばかりとなつて、果ては、相互に、共倒れと云ふことになり、其の結果は、相互に自分を利するどころか、反つて、害することになつて仕舞ふのである。若し、夫れ、吾々は、單に、自己の利益のみ思ふに止まらず、亦、他人の利益をも計り、他人を思ひ、他人を愛するの、事實決して蔽ふべからざるものあるを考へ、又、たとひ、現在は、事實に於てさう出来ななくても、將來は、さうわらした

いものとの、深き人情を有し、高き理想をもつて居ることを見れば、そして、道徳と云ひ、善と云ふことは、他人を害せず、他人を益することであると、殆ど、直覺的に、常識的に、誰れも思つて居ることであると知つたならば、この説の如何に誤れるものであるかと云ふことが、自ら分るのである。

今度は、前のに反して、利他説を唱ふるものを考へて見やう。この説は、前二三の説に比べては、其れ自身全く、本來、道徳的のものであつて、随つて其の缺點も、亦少いが、それでも、なほ、大に不十分な點がある。第一、よしや、説の性質は、如何に立派であるにしても、若し、假りに、極めて嚴密に、これを實踐するとすれば、即ち自分を利するやうなことは、毫もこれをせぬ、と云ふことを、吾々相互に嚴密に實行するとしたならば、其の結果、自分の身體と精神と毫も發展せず、次第々々に衰退して行き、遂には、その、他人の利する行動も、亦自ら出來ないことになる。なほ、可笑しいことは、これを反面から、

能く考へて見ると、御互に、毫も自分を利することをせぬと定めて行くとならば、亦御互に、他人から利してくれるのを峻拒することになるから、随つて、世に利他的行爲は必要もなく、またこれを行ふことも出來なくなる割合である。若し、強いて對者をして、自己の行はうとする、利他的云爲を受けさすと、云ふことになる、その行爲は、積極的には、純利他的行動のみをして、毫も利己的行動を——たとひ、それが受動的なるにせよ——意識的には、せぬと云ふ、善動機を踏みつけることになり、消極的には、對者をして、自ら惡を實行せしめると云ふことになる譯で、何れにしても、不道徳と云ふことになつて、此説、そのものにとつて、甚だ自家撞着のこと、謂はざるを得ない。且つや、この説は、前説に於て、各人が、すべて、利己的行爲を、目的的に達成することが、全然、不可能のことに歸したと、同じやうに、これも、亦、全然不可能のことになるのである。なほ、旁々利己的行爲も、相互に、他人に害を與へたり、正義に悖



つたり、人情に背いたり、せない限りに於ては、決して悪いことではなく、この説の立場から考へても、他人を利益する所の行爲をするために、順序として先づ自分の身心を、より善くすると、云ふ意味に於てならば、寧ろさうするのが善いことになることやなど、その他、色々と考察して行くと、この説も亦、決して充分のものとは言はれぬのである。

次に、個人本位の道德観をとるべきか、社會本位の道德説をとるべきか、を見てみやうと思ふ。申すまでもなく、個人各自のない社會を思ふことは出来ず、個人々々の集成によつて、社會が組織されて居るのであることは、云ふまでもないことである。けれども、而も、社會は個人々々の單なる集團でない。各個人を要素として成れる所の社會は、個人に對する、一個獨立の、別のもの、社會格を有して居るのである。そして、其の要素たり、細胞たるところの、各個人が、大なり、小なり、其の社會に及ぼすところの影響あることも、元より認

めざるを得ないが、それと同時に、其の社會より個人に及ぼされるところの、其の影響の、大なることをも亦認めざるを得ない。吾々は、身體的に、生存し、活動する所の食衣住のことから、交通等のことに至るまで、單に、或る個人の力や、恩惠によつてあるところのものよりも、纏まつたる、社會の力や恩惠によつてあるところの、如何に多大なるものがあるかを思はぬければならぬ。更にこれを、言語、思想の方面に見、學問、藝術、宗教等について考へたならば、如何。若し、吾々の、日常生活の要件の中から、それ、これと社會的のものを引き去り取り除いて行つたならば、單に、父だとか、子だとか等、家庭からや、或は、親戚朋友等からのみのものが、果して幾干残ることであらうか。ましてや、これを、全く、自己自身の力にのみよりて有するものに於てをやである。極めて、嚴密に云ふたならば、純粹なる、自己存在が、果して有りうるや否やすら疑はれるほどである。こう云ふ風に考へて見ると、吾々、個人々々が、た

だ自己のみのことを思つて、人生生活の目的だの、理想だのと云ふやうなものを定められるものでない。單に、二三近親の者や、四五の同類の者やだけの都合のみを顧慮すれば、それで善いと云はれるものではない。眞に自己の存在を計り、發展を希ひ、合理的たる人生生活を成遂げたいと思ふものは必ずや正、に社會の方面をも、大に顧慮し、能ふるだけ、その改善、進展を計らなければならぬ。眞の、自己の發展は、即ち社會の發展、社會の發展は即ち自己の發展である。即ち二者相即の關係に於てあるものである。是れ、恰も、吾々の全體の健否は、各機能や官器の健否に因り、各機能や、官器の健否は、全身體の健否にかゝるのと同じことである。であるから、單に個人の方面をのみ見て、其の方からのみ、善惡の標準を定めやうとするのは、大なる誤りである。

これと同じやうに、單に、社會の方面をのみ見て、其の方からのみ、善惡の標準を定めやうとするのも、亦誤りである。考へやうによつては、個人は、單に、其の社會の進展の爲に、その一要素とし、道具立てとしてのみ、存在するものであつて、年々、歳々、生じては滅し、滅しては生じ、新陳代謝して行くものであり、永遠に存在し進展して行く所のものは、それは實に社會である。そは、恰も、吾々の身體に於ける、細胞、纖維や、血肉やは、時々刻々、年々、歳々其の生滅、新陳代謝を繰返して行き、爲に身體は、その存在の生活を、繼續して行つて居るのと同じである。と、かう見られないでもない。ないが、併し、それにしてから、失張り、其の個人、各自の健否、良、不良等が、社會其のもの、健否、良、不良に係はること已に前に述べたるが如くであれば、單に其の點から云つても、只だ社會自身の方のみを考へて、個人各自の方を毫も顧慮せぬと云ふことは誤りである。況んや、個人個人がなくして、社會だけが、在るべき筈のものではなく、その改善も發展もあつたものでないに於てをやである。この故に、吾々人生は、個人の方からは、社會の方を思ひ、社會の方からは、

個人の方を思ふ。と、いふ具合にして、相互に、其改善、發展を計つて行く。と云ふことにすればよいのである。所謂、個人と社會とは、二つで一つであり、一つで二つである。と云ふ關係に於てあるものであり、切つて切れぬ、離して離すことの出来ぬ、所謂相即不離のものであるから、個人的、理想的生活の實現は、亦社會的、理想的生活の實現によつて成さるべきものであり、社會的、理想的生活の實現は、亦個人的、理想的生活の實現によつて成さるべきものであると云はんければならぬ。

今度は、道德の標準を、單に、主觀的に定めるべきであるか、全く、客觀的に定めるべきであるか。と云ふ問題を考へて見やうと思ふ。これは、前の、個人説と社會説との關係に於て述べたところと、大體に於て、同じやうな關係を見るのであるが、而もこの方は、其の説及び説の遵奉如何が、吾々、日常生活に觸れること、一層切なるものがあるから、節を改めて、出来るだけ詳説することにしよう。

吾々個人の道德意識とか道德感とか、云ふもの、即ち道德的判斷と云ふものは、大體に於ては、其の當時、屬する所の、社會情調や、社會制裁、即ち、社會の道德判斷に一致するものであつて、それと衝突すると云ふやうなどは、餘り無いことである。尤も、時代思想に、急激な變化が起つたり、新舊思想の混亂して居る時とか、云ふと、舅姑と嫁、父と子、師と弟とか、云ふ者の考へが相衝突すると、云ふやうなことは少くない。また、それは、社會と個人との間にも、往々にして、起るところの現象である。普通、常人との間には、まづ、さうしたことは無い。偶々、有るにしても、さしたることは、他に及ぼすところの影響も、亦、極めて少いが、若、それが、大變に偉い人との間に起つたとする、なか／＼容易ならぬことで、他に及ぼすところの影響も、亦非常に大きなものである。あるが、併し、大抵は、一般社會からは、或は、非難せられ、

或は、嘲笑せられる。少くとも、さう云ふ人の行動云爲は、一般人からは、まるで、顧みられないで、尊敬は愚か、認めやうとしてくれる者すら、極めて少くあるが、さて、それが、少いなりにも、真に共鳴され、崇拜されるところの青年少者に及ぼすところの影響感化は實に深大なるものがある。そして、其の人が死んでから後、百年と経ち、五百年と経ち、千年と経つと、多少、有識のものから、次第くゝに、其の偉大であつたことや、卓越して居つたことやが認められて來、賞讃、尊敬の度が高まつて來て、終には、一般萬衆に、永久に互つて、崇拜信仰せられるやうになり、吾々人間の儀表となり、人生の標的とせられるやうになるのである。そこで、問題は、いよゝゝ益すゝゝ重大になつて來るのである。

抑々、道德とは、先づ吾々相互間の一致和合を旨とし、皆が、互に、平等に其の人格を尊重しあひ、而も又、差別的に、自由に、各々が、其の性格のまに

まに、能く、人間としての、團體的生活を實現し、社會的生活を進展せしめて行かうとするところに在るのである。で、幸に、各個人相互の間、若くは各個人と團體や、社會との間、又は團體相互、社會相互の間が、克く公正平和に行つて居つたならば、それは誠に結構なことで、實のところ、誰も、皆さう希なぬ者としてはなない。道德の本質、目的は元より、さうなくてはならぬのである。所が、若し、それが、一朝、齟齬し、衝突してくると、其處に問題が生ずる。單に、相互の私欲、我儘と云ふやうなことで、不道德的現象の起り、事實の生ずるのは、それは暫らく別として、若し、それが、個人の良心、道德的判斷と、社會の風俗、習慣又は道德的判斷とが、相一致せぬ。而も、其の個人の主觀的道德觀念や、判斷やが、極めて明確であり、信念が極めて強固である。と云ふやうな場合には、どうであるか。元より、普通一般の場合に於ては、個人の良心、即ち主觀的道德意識と、社會情調や制裁、即ち客觀的道德意識と相一致す

るものであり、又、一致するのが當然であるが、而も、或は、右のやうな特別の場合や、關係の生ずることも、決して無いとは云はれぬ。已に、史上の事實として、随分あつたことであれば、今後とても亦、無いとは云はれぬ。尤も、さう云ふやうな、非凡な、觀念や、信念やを有して居る、其の者が、果して、眞に善い方のものであるか、單に狂愚に過ぎないものであるかどうかは、先きへ行つて見なければ、能くは分るものでない。が、亦、それが、其の親子、兄弟や、親戚、朋友などに、全く判別出來かねると云ふやうなこともなからう。若し、それが、どうしても、さう云ふ、近親昵戀の者や、識者賢人と呼ばれる人にも、誰にも、單に非常識であり、狂的であると見られ、或は、若し、何日までも、そのまゝに棄て、置けば、何をするか分らぬ、社會や國家の爲に危ない。と、思はれるほどであつたならば、或は、出來るだけ教授もし、矯正も加ふるやうにせなければならず、相當の監視もせぬければならず、事により、度

によつては、或は法律的制裁をも加へんければならぬかも知れぬ。が、これを當の本人の方から見れば、たとひ、他からどう對されやうとも、自己の言ふ所は眞である。自己の行ふところは善である。と、かう固く信じ、自己の思想や主張や、態度や、さては信念やは、それ等は、皆自己の生命である。寧ろ自身自身である。死なうと、生きやうと、寸毫もこれを變改することは出來ぬ。と、頑として動かぬとすれば、それまでのことで、かくの如き内的生活に對しては、他から亦如何ともすることが出來ぬ。よしや、身體は、如何様に之を束縛しやうとも、或は生命を奪はうとも、其の思想、其の精神、其の魂は、遂にどうすることも出來ぬ。吾々の、眞の自分の思想、借物でない、本當の思想、特に信念とか、云ふほどのものは、何かの機微にふれて、天啓によるとか、心機一轉するとかして、自覺するところがあるか、或は、更に考察、研究の結果、自然に、自發的に變改するやうになつて來るかでなければ、他からこれを、強いて

動かさずと、云ふやうなことは、決して出来るものではない。普通、平凡な者の行動云爲は、其の規準を、大抵は他に取りうるものであり、概して模倣的のものであるけれども、それが、非凡の人になると、その、すべてが、全く自律的であつて、重要な、大事は勿論のこと、如何なる些細な小事であつても、苟も、自己の理想、主義、等から割り出された、系統的のものが無いと云ふことはなく、若し、自己の識見や、判断と、他人や、社會のそれ等とが、相異するところが生ずるやうな場合は、必ずや、自己の方から、他人や、社會を律して行かうとし、教化して行かうとするものであつて、盲目的に他人や、社會の方から律されて行くの、動かされるのと、云ふやうなことは決してない。さう云ふ人物を、左右したり、制裁したりする權威は、其の人、自らの、人格的判断を除いては、亦、他にあるものでない。

上來述べ來つたやうに、偉人とか、傑士とか、云はれるやうな人物であると、

其の當時の、常人や、一般社會やの、道德思想や、觀念やとに甚しき相違があり懸隔が生じて來ることがあるけれども、それが常人になると、決してさう云ふことはなく、若しあるにしても、それは、極めて薄弱なものであり、不徹底なものであつたりして、大概は、世の風潮と共に行動し云爲して行くのである。併しかう云ふこと位はある。例へば、父の云ふことや教師の教へる所やなど、自分の思ふ所や感ずる所とが多少異つたり、全く相反したりすることがある。あるが、さう云ふ場合に當つても、結局、其の何れに従ひ如何に行動するかは、主として、其の本人の性格に因り、かたぐ、それと習慣や、環境等との關係に依つて規定される所の、意志決定に因る。と、云ふより外はない。即ち、其の、行動云爲は、其の本人の、主觀的心理作用と、周圍の客觀的事物との、關係によつて出来る所の、自然の結果であつて、單に、他から機械的に左右され、規定せられて出來たものでは決してない。これを主觀的に見れば、其の道程は、

心理的には自由であつて、其の行動云爲は、所詮、其の者、自身のものであると云はんければならぬ。乃ち、此の意味に於ては、偉人、傑士の場合と同じやうに、眞に自己を律する者は、即ち自己である。人格者たる、吾人自己の品性、随つて亦、自己の趣味や、情意やこそは、實に自己に對する最大權威であると、云ふことは、それが、偉人傑士たると、常人たるとに論なく、何人に於ても、皆、同様であると云はざるを得ないのである。

是に於て、吾人は、結論として、如何なる時、如何なる場合に於ても、自己の、取るべき態度は、自己の、是れぞと確信する所を毅然として言ひ、泰然として行ふ。と云ふより外、道はない。已に一人前の人格者たる吾々は、即ち、自己が人生に對する唯一の指導者であり、判官である、自己を生かすも殺すも、自己自身である。指導され、裁判される者と、指導し、裁判する者と、實は、全く同一のものであつて、決して、二つの別の者ではないのである。と、かう

云ふと、それは餘りに主觀的結論である。あるけれども、自然に、そこに到達し來つた、眞理であるとするれば致方もない。主觀は、實に最後の決定者である。究竟の權威者である。而も、若し、夫れ、これを客觀的に見るならば、他人とか、社會とか、世界とか、云ふやうなものが、自己以外に嚴然として存在して居ることも、亦、決して否定することの出來ぬ、事實である、勝手に、主觀的にこれを打消すほどに、偏主觀的になることは、吾々の到底爲し能はざることである。そして、已に、それが眞實である以上、其の客觀たる、他人や、社會や、世界や、そして、それより生ずる習慣や、風俗や、意識やは、亦當然主觀たり、主觀の持主たる個人を感化し、教育し、指導し、制裁して、能く、其の方に順應し適合するやうに努めんければならぬし、また、自らさうなつて居るのである。さもあらばあれ、實は、社會意識や、氣分や、情調やは、個人意識や、氣分や、情調やの外に、別に、これあるものではない。個人意識は、やが

て、亦社會意識であり、個人の氣分、情調は、やがて、亦社會の氣分、情調である。かう考へて來ると、實際に於ては、吾々、人間の善惡の標準、道德的理想を、これを主觀に置くべきか、これを客觀に置くべきかは、結局、問題にならぬことであつて、吾々は、たゞ各自、各自に理想を立て、自分を修養し、自分を進歩發展せしむることに努むればよい。と、云ふことになるのであるが、ともかくも、批評の結論を與へるとして、これを、主觀論の方について言ふならば、前來述べ來つたところによつても分るやうに、事實に於て、結局はさう云ふことに、自然となつてあることであつて、なほ、殊更に人爲的に、その標準を、全く主觀的に定むるやうにすると云ふ要もないことであるが、而も、理想的にこれを望まば、元と、吾々、個人は、一面、社會的方面をも願慮せぬければならぬことは、已に前に於て述べたるがやうであるから、爰にも亦、同じ理由の下に、たとひ主觀本位を取つて行くことにしてからが、矢張り、客觀的

方面をも相考へて、二者を相關的に、改善、進展さして行くと云ふことにせぬければならぬ。それから、次に客觀論の方について言ふならば、かくの如く已に事實に於て、結局は吾人、各自の主觀——即ち人格的判斷が、善惡最後の判斷であると云ふことになつてあるものとすれば、たとひ、如何に人爲的に、單に、これを客觀的に定めなければならぬと主張することにしてからが、事實に於て、何にもならぬことである。それよりも、寧ろ主觀的方面、個人々々の思想の方を重きに置いて、これを修養、改善し、進歩、發展せしむることに努めるやうにすれば、それが、當然の結果として、亦、自ら客觀的方面、社會的方面の改善となり、進展となることになるのである。要するに、其の何れを偏重するも共に誤りであるから、主客共に、相考へ、相思つて、二者相即的に、善しとする所を、其の理想とし標準として行くことにせぬければならぬ。そは、恰も個人と社會との關係に於て見たるところと、正に相同じであると言ふより



外はない。

それから、今度は、吾々が、吾々の行動云爲を批評するに當りて、單に、動機さへよければ、結果の如何は問ふ所ではないか、或は、單に、結果さへよければ、動機の如何は問ふを要せぬか、と、云ふ問題を考へて見やうと思ふ。動機、詳しく言へば、その、之を行ふに當りての心持ち、目的さへ、純粹であり、同情に基づき、且つ専ら對者の利益、幸福をのみ念として、或は言ひ、或は爲したる事であれば、若し、たとひ、其の結果が如何様であらうとも、其の言行の善たるには、毫も差聞えない。たとひ、事、豫期ほどに行かなくとも、或は却つて目的に背反したやうな、思はぬ惡結果を來たすやうなことになるうとも、其の言行そのもの、善たることを傷けるやうなことは、少しもないと云はれるか、どうかと云ふに、さうは行かぬ。尤も、單に、其の事の結果が、不充分であるとか、悪いとか、云ふために、其の言行者の人物の徳性までも、傷つける

と云ふやうなことは、決してない。其の人格、其のものを非難し、攻撃すると、云ふやうなことは、それは、甚だ間違つて居る。併しながら、其の言行、其のものに就いては、大なり、小なり、結果の如何に應じて非難されるのは當然のことである。なぜなれば、吾々が、言行の、善なりや惡なりやを、批判する所の意味、内容の如何はと云へば、申すまでもなく、その言行が直接にか間接にか、早いか晚いか、必ずや、當に對者が利益、幸福を受くるか害、不幸を受くるか、と云ふことを豫期してのことであるのであつて、善を行はんとするに當つて、初めより、單に心持や目的さへよろしければ、其の結果が、どうならうと、構はぬと云ふやうなことは、當の言行者は元より、亦、側の者も、決して思はぬことである、已に、さうであるとするれば、其の結果が、豫期に違つたり、背反したり、するやうな場合には、結果について、其の思慮の足りなかつたことや、方法の當を得なかつたことやなどに對して、當の本人自らも不快を感じ、

不満足を覚え、責任を感じずるであらうし、側の者も、其れらの點について不満を感じ、非難をするであらう。であるから、完全なる善は、その言行の結果と、動機とが相一致した場合に、これを認めらるべきものである。これに反して、動機は、別に對者に利益を興へやうの、幸福を來たさうのと、云ふのではなく、單に自己の欲するがまにまにした事、若しくは、寧ろ、自己の利益を得よう、幸福を計らうとして爲したる事の、其の結果が、直接若しくは間接に、他人に對して、自然に、利益を得しめ幸福ならしめたときは、どうかと云へば、この場合に於ては、單に其の結果のみを、善いと云ふことは言へるけれども、其の言行其のものは、元より、悪いとも言へぬが、亦決して、善いと言ふことは出來ぬ。況んや。其の言行者、其の人の徳を稱へるの、賞めるの、と云ふやうなことは猶更出來ぬ。即ち、單に言行の結果のみが、善いからとて、それのみで、これを完全なる善と云ふことは出來ぬ。それが完全なる善たるには、

善なる動機に、善なる結果が伴はぬければならぬ。と、同じやうに、完全なる善たるには、善なる結果に、善なる動機が伴はぬければならぬ。併し、行爲の善なるには、善なる動機がなくてはならぬが、動機の善なるには、必ずしも善なる行爲を要せぬ。單に、純粹に善なる動機はありうるのである。即ち嚴密に言へば、主觀的善は獨立してあるのであるけれども、客觀的善は、獨立して有るものではない。若し、別々に離れかして見るとすれば、動機と、行爲と、結果と、三つの中で、善惡の判断の對象としては、動機が、最も重なるもので、行爲は、その次ぎで、結果が、最も軽いのである。而も、善惡、何れにしても完全なる行爲たるには、動機と結果との相一致するものでなくてはならぬことは、前に述べたるがやうである。若し、夫れ、なほ、改めて、之を惡行爲の批判について詳しく考へて見ても、善行爲の批判について、述べたところを考へて、これを推測すれば自ら分ることである。たゞ其の性質の相反するのみであ

つて、推論の形式、次第は、正に善なる方面のそれと同じことであるのである。次に、良心説と功利説とについて考へて見やう。良心のまにまに、良心の命令、禁止に従つて、行動云爲さへして居れば、それで善い。と、云ふのは、良心説の主張する所であるが、併し、良心が、如何なる場合に於ても、何時でも、如何なる事に對しても、常に正確に判断を爲し、穩當に感じ、健固に意志するものと、定まつて居るものならば、それで宜しいけれども、それが、さう行かぬときには、さう、單純にきめ込むことは出来ぬ。吾々の人事は、性質、關係が、なか／＼錯綜し、複雑してゐるものであつて、單に、直覺的に行くものばかりでない。これは、恰も、二二が四とか、直線は二點間の最短距離であるとか、云ふやうな、極めて簡易なことならば、誰にでも、すぐに、一様に分ることであるけれども、それが、次第／＼に複雑な計算になり、考量になつて來ると、なか／＼容易に分るものでなく、普通の者には、全く分りかねるやうな問

題すら出て來る位である。それと同じやうに、單に他人の物を盗むのは悪いとか、他人を打つのはいかぬとか、云ふ位のことならば、すぐ、誰にでも、さうだと思はれもし、感ぜられもするけれども、それが、次第／＼に複雑な行爲になり、思慮になつて來ると、どう判断して善いやら、容易に分るものでない。單純なる感じや、一寸とした思付きの意志では、行つてゆけるものではない。大に研究し、思考し、熟慮せんければならぬことになる。そして、已に、かく思考、研究等の心理過程を、經るものとすれば、そこには、他に、何等かの材料とか、根抵とか、目的とか、何とか、云ふやうなものを豫想せんければならぬことになる。即ち、直覺的良心以外に、もつと浩汎な、全體的な、人格的、心理的見地より、これを判断し、情意するといふやうにならなければならぬ。尤も良心と云ふものを、全人格、人格の中心格子、と、云ふ風に見るならば別だが、さうではなくて、單に、從來、謂ひ來つた、單純なる直覺的のものとし

ての良心とするならば、此の點に於て、この説によるのは不完全なこと、云はぬければならぬ。それから、善惡の標準を、社會、公衆の利益、幸福——所謂、是大數の最大幸福——と云ふやうなことに置く所の説、即ち功利説について見て見ることにしやう。此の説によると、先づ、第一に、吾人の頭に浮ぶことは、吾々人間の利益と云ふことは、どう云ふことであるかとの問題である。吾々人間の利益は、單に物質的、身體的のそれのみではない。精神的のものもある。少くとも、精神的のものをも、一緒にして考へなければならぬ。さう云ふ、綜合的の意味に於ける、公衆の利益、最大多數の利益とは、何であるか。吾々人間は、僅に二人、三人と寄つても、單に外から見た、身體の大小長短、瘦肥等に於て、各々に異なつて居る。況んや相互の腦組織、性格等の隱微なるものに於てをやである。さう云ふ、各々に、相異なる者の、たつた二人の、眞に共通的なる利益、幸福を、同様或は同一に定める、と、云ふことが出来やう。況し

てや、幾千、幾萬、幾百千萬の、大多數者間に於ける、共通のものに於てをやである。吾々人間の、眞の意味に於ける幸福は、即ち各自の性格に應じ、境遇に應ずる所のものである。随つて、其の要求するところのものは、嚴密には、各人千様、萬態であるべきである。又かくの如き、主觀的の幸福と云ふ者の多少を、どうして計ることが出来るか。而も、今、これを、本來、必ず、同一物を要求する、多數者に對して、同一なる物を、單に數量的に、これを分配するのと、同じやうなことに思ふのは、大なる根本的の誤りである。又、若し、假りに、すべての人が、すべて同一物を要求するとし、同一物を、たゞ、數量的に分配すればよいとしてからが、其の比率を何によつて定めやうとするか、況んや、成るべく多くの數を、成るべく多くの人に附與すると云ふことが、欲に限りなく、年に限りなく増殖する人に對して、どうして、矛盾なく行へることであらうか。など、思考して行けば、此の説の、到底取るに足るものでないことが分る。

最後に、自我實現説と自我完全説とについて考へて見ることにしやう。第一に、自我とは何んであるか。申すまでもなく頭を天に向けて立つて歩き、知情意の三方面を有する、心と云ふものを持つて居る所の、道徳的動物である。即ち、一定の、統覺的人格者を意味して居るのである。所が、其の身體に於ても、これで、全く申し分がないと、云ふやうな、眞に完全無缺と云ふやうな、さう云ふ者は、恐らくはなからう、若しあるとしても、それは、極めて稀なことであつて、何等か申分があり、何の點にか、缺くる所のあるのが、先づ、普通一般の吾々人間である。特に、これを、精神的方面の知情意、即ち心と云ふ方について見たならば、猶更のことである。であるからして、若しこれを、如實的に此の現在の身體に依つて、此の現在の精神を、そのまゝに實現すると云ふことであつたならば、それは、勿論つまらぬことであつて、元より善の標準とすることは出来ぬが、さうでなくて、此の今の身心共に不完全なる所の吾れを、

能く、自覺して居る吾が、此の今に於て、出来得る限りの努力をして、吾が將來に向つて、畫く所の、理想に近づかしめて行かうとする、さう云ふ意味に於ての自我實現と云ふことであるならば、それは、洵に結構なことであり、善の標準とすることが出来る。尤も此の場合に於ては、此の吾なるものは、事實に於ても、さう云ふものであるが、又理想に於ても、全く社會的のものである。此の社會を、全く離れての吾なる者は、元より在るべき筈のものではない。随つて、此の吾を眞に能く實現して行かうと思へば、必ずや、亦、此の社會を善くして行かぬければならぬ。二者の存在と二者の發展とは正に密接不離の關係に於てあるものである、二者の幸、不幸は眞に相即のものであると云ふことを、徹底的に承知して居る上のことではなくてはならぬのである。そして、眞に能くかう云ふ意味や關係やを承知して居る上のこと、としての完全説ならば、自我完全説でも、又社會完全説でも、何れでも、實に結構なる説と謂はなければならぬ。

要するに、上來述べ去り、説き來つた所は、之を主觀的に見れば、吾人人間の善とは、吾々各自々々の、真我の満足であり、これを客觀的に見れば、社會の完全であると云はんければならぬ。けれども、何處でも、吾々個人意識と社會意識とが丁度、いゝ具合に一致して居るものではない。個人は、社會に對して不満を抱いて居り、社會は、個人に對して不都合を感じて居ることが、決して少くはない。今日の處では、寧ろ、それが、人間界の常態である。と、云はんければならぬ位である。

即ち、事實に於ては、理想的、具體的善の行はれて居る場合は全くない。吾々は、たゞ、これを理想として居るのみである。そして、事實に於ては、出来るだけ、それに近い邊の行動を以て、心を慰め、一步一步でも、理想の境地に近づかんことを楽しみとし、相、努力して行つて居るのである。と云ふより外、仕方がない。而も、吾人は、此の二者一致の實現を望むところに、善の標

準を置くべきである。随つてまた、その、歩みよりと、全くの一致とは、亦これを個人各自、及び社會全體の、修養と教化とに、待つより外はないのである。さもあらばあれ、具體的に、詳細に何を善とするかと云ふこと、また、それを實行するとせぬとは、所詮、これを、個人各自の主觀、人格的批判に待ち、其れへの満足、不満足に歸せしむるより外、如何ともして見やうがないのである。

## 六、欲望と満足と目的

渴すれば飲みたいと思ひ、飢うれば食ひたいと思ふのは、正に、吾々人間の常である。自分の好きな物を欲しがるのは、幼老、男女、貴賤、貧富、皆同じである。吾々は皆飲食のことをはじめ、其他、色々な生理的、欲情を充足しやうとして、其の時、その處に於て努力して居る。そして、若しそれが欲しい

だけ得られないと不満であり、得られると満足である。ところが、今日の吾々人間は、簡単な努力で、容易に、さう云ふ飲食物を得ると云ふことは出来ぬ。水を飲んだり、木の實を食つたりして、それで満足して居た、原始時代の人は違ひ、湯を呑み、茶を呑み、酒を呑み、其の他、色々の飲み物を欲しがつたり、飯よ菜よ、肴よ何よと、様々の物を食ひたがる。日本料理は勿論西洋料理もよし、支那料理なほよしと、山海の珍味にも、變つた料理をほしがる。と云つた風に、贅澤を言へば、限りがない。單に、飲んで食つて居さへすれば、それでよいとしてさへ、吾々の努力はなか／＼である。ところが、衣服も着んければならず、家にも住まなければならぬ。そして、此等の物についての欲望も亦次第／＼に増加し、向上して行くのである。其の他、何の欲望にしてもさうである。その必要と欲望とを、普通に充たして行くだけが、なか／＼骨が折れることである。所謂、驕を得て蜀を望むと、云ふのは、寧ろ吾々人間の常であ

る。もう、これでよい。この上は要らぬと、云ふやうなことは決してない。五百圓の財産を得れば、千圓二千圓を得たくなり、千圓二千圓を得れば、五千圓一萬圓を得たくなる。と云つたやうに、何萬何千萬と、幾ら得て行つても、所詮、限りのないものである。權勢を得ることにしても、さうである。一家より一村、一村より一郡と云ふやうに、遂に一國となり全世界にと、云ふ風に擴がつて行つて、決して、限りのあるものでない。又、これを名譽のことについて、見てもさうで、現世は愚か、死んだ後までもと、底止するところを知らぬものである。そして、かくの如き、吾々の欲望の増加、向上、擴張と云ふことは、獨り、上述のやうな方面のことにみに止まらず、吾々の遊戲、競争のことから、嗜好、藝術、學問、其の他、何事についても、亦同じであつて、到底其の際限を知らぬものである。

一體、吾々人間の衝動とか、欲情とか、いふやうな、生理的又は心理的の活

きは、吾々が、生れてから息引きとるまで、絶えず生滅、起伏して居るものであり、欲望とか意志とか、云ふやうな心理的のものも、假りに、自我意識があり、自己統覺のある間は、亦、絶えずあるものである。人生は、畢竟、吾々人間が呼吸をして居り、意識を有して居る間の、衝動、欲望、又は意志等の、變遷的繼續と云ふべきものであらう。或る衝動が起ると、何等か適當の動作によつて、それを充足せしめようとし、或る欲望が起ると、何等か適當な行爲によつて、それを満足せしめようとする。そして、幸に、能くそれが充足され、満足出來ると、又、更にそれ以外或はそれ以上の、何等かの衝動が生じ欲望が起る。と云つた風に、行くのである。あるが、若し、能くそれを充足さし満足させることが出來ないとなると、則ち其處に苦痛を覺える。けれども、何とかして、その苦痛を除き、欲望を達しやうと努力して居る、其の期待的時間には、緊張した、一種の快的氣分がして居て、なか／＼元氣なものである。が、若し、そ

れが、どうしても出來ない、絶望の外はない。と、云ふことになる、則ち悲哀の情緒が起り、落膽の氣になり、それが、或は非常に昂じては、終に狂氣になつたり、自殺をしたりする様になるやうなこともある、たとひ、一時はその欲望の達成が、非常に困難に見え、骨折や我慢が、一と通でなくても、多少にても、望みがあり、次第／＼に出來さうになつて來るとか、或は全く出來るかすると、則ち、大に満足の快感を覺えるに至るものである。併し、一旦、満足を與へた、其の事物が、依然として存續して居る間は、それに對する心理状態は、元より楽しくあり、安靜を持續して行くけれども、吾々の身心や、それが、外界の事物との關係やは、決して、さう單純なものでもなく、又不變のものでもないから、其處に、自然、何等かの缺乏を感じたり、欲望が起つたりするものである。且つや、一旦欲望した目的が、已に獲得されて見ると、思つた程に、さう快樂を覺えるものでもなく、よしや、物事それ自身には、別に何等の變化、



衰退等のことが、ないにしても、それに對しての、好愛の念は、多少薄らぎ行くの傾向があるのであり、其の上に、物それ自身にまで、亦多少の衰退、變化等のことでもあらうものなら、猶更のことである。それ故に、何れにしても、吾々には、絶えず、何等か、多少の新しき欲望が生起しつゝあるものである、随つて生ずれば、随つて得、随つて得れば、又、随つて生じて行くのである。これを要するに、吾々人間生活の中心核子は、吾々各自の個性に基づく欲望や意志と、そして、これを充足しやうとする努力との、連鎖劇である。簡單なる生理的欲動をはじめとし、富貴欲、權勢欲、名譽欲等、さては、審美欲、知識欲等、複雑なるものに至るまでの、欲望や、意志やと、そして、それを充足しやうとする努力との、對比關係に於て在る、感情若くは情操の、不斷の緊張である。と、云ふべきである。

## 七、性格

吾々が、何を欲望し、何に向つて意志するかは、其の人、其の人によつて異なるものである。嚴密に云へば、吾々人間は二人として、同一の身體、腦髓を持つて居るものはなく、随つて、亦、同一の性格を有し、同一の意欲を起すと云ふやうなことは無い筈のものである。かの『蓼食う蟲も好きずき』と云ふ俚諺は、能く此の眞理を道破したものである。甘い物でなくてはならぬ者もあれば、辛いものでなくてはならぬ者もある。はでな柄に限ると思ふ者もあれば、しみな柄に限ると思ふ者もある。古風な、純日本風な家を好む者もあれば、ハイカラな純西洋風のを喜ぶ者もある。と云つたやうに、大體に於てちがう。品質、程度など微細な點まで考へたならば、また、夫々に相、異なつて居つて、千萬人が千萬人ながら、別々である。そして、それは、單に食、衣、住のこと

にのみ止まらず、これを職業のことに見ても、學問のことに見ても、遊戯、娛樂に見ても、其の他、何について見ても同じことで、其の、何れを欲し、何れを擇ぶかは、一に其の人、各自の性格に因るものである。若し、それ、命よりも金が大事だと思ふやうな者の、唾はきかけくれやうが、殺されやうが、一圓の金を出すことを欲せぬと云ふが如き、或は、一にも名譽二にも名譽と、たゞ、もう名譽が、人生のすべてであるかの如く思つてゐる者が、その爲には、金錢は愚か、大事の生命でさへ、切れた草鞋を捨てるよりも軽く抛げ出すと云ふが如き、其の他、或は冒險的なことばかりやつて、遂に變死したりするが如き、或は、學問、研究に熱中して、遂に病死したりするが如き、其の他、斯くの如き、尋常ならざる行動、云爲を敢へてする者の如きは、亦、是れ、すべて其本人の性格に因るものと云はざるを得ない。吾人の行動云爲は、それが、他動的なると、自動的になるとに拘はらず、詮ずる所、吾人自身のものである。人事は、極

めて複雑であり、世態は、甚だ多様であるけれども、此の間に生活し、此の中に云爲するところの、吾人の行動は畢竟、吾人各自の、天より稟けた、性格のまに／＼規定されつゝ、あるものであると謂はざるを得ないのである。

## 第三 思想と批判

## 一、世界観

吾々の肉體を組織する所の物質又は其の要素と、世界、萬物を組成する所の物質又は其の要素とは、元來相異なつたものではない。其の組成の過程や、生滅或は變化の仕方や、特にこれが具體的に顯現する所の形體、様式やなどに至つては、元より、多少の相異はあり、程度の差別はあるけれども、而もこれを次第々に抽象し、概括して行つて見ると、さしたる相異はなく、嚴密なる區別は尙、更ない。どれも、結局は同じやうな、或る一定の法則、勢力、又は運命、と云つたやうなものによつて、存在し、變現、出沒して居ると云ふことが分る。吾々人間相互、動物相互、又は植物相互の間は勿論のこと、又吾々

人間と動物、動物と植物との間などに於ても、亦、或は直接に、或は間接に、相、關連して居つて、切らうと思つても切ること出來ぬものである。例へば、同一の日光、同一の空氣、又は、同一の水によつて生活して居るが如き、或は、吾々が、元と大根や、葱や、芋やを食つて、そして排泄した所の、其の糞尿の如きものを吸収して生産し、成長した所の、其の植物を食つて成長した所の、其の牛馬などを、復た吾々が食つて、吾々の身體を營養し、勢力を作つて、或は身體的に、或は精神的に、絶えざる活動をして居るが如き、即ちそれである。若し夫れ、此の關係を、吾々人間相互の生活について見るならば、更に、極めて、其切なるものもあるを知るであらう。例へば、吾々の衣服、飲食、住居等に要する、日常品のことから、交通、通信、運搬等のことに至るまで、すべて、或は、縦に、歴史的に、或は、横に、地理的に、幾千萬の人々の恩恵に依つて居るか知れぬ。言語、文字、文章等をはじめとし、繪畫、彫刻、音樂等の

嗜好から、文學、哲學、道德、宗教等の感情、思想等に至るまでの、すべてのことを考へて見れば、互に其の影響を受け、感化を及ぼされて居ることの、如何に廣く、如何に大なるものであるかを知ることが出来る。かう云ふやうなことを人間萬事について、能く思考して見たならば、たゞの、純粹な自分と云ふやうなものが、果して、能く、有りうるものであらうか。分解に分解を加へ、綜合に綜合を重ね、抽象に抽象を施し、概念を、更に概念にして行くなれば、これが、直に、本當の自分の持ち前であると、云ふやうな所は、或は、殆ど無くなるのかも知れぬ。若し、強ひてこれありとするならば、それは、正に時間と空間とを超越した、所謂、自我統覺の感じであらう。これこそは、實に唯一の自分である、眞の我である。とかう思はれもし、言はれもするやうである。あるが、かう考へて見ると、自分と云ふものは、實は、寧ろ、甚だ、憐れ、果敢ない、有るか無いかのやうな點のやうなものであつて、洵に、つまりぬもの

ゝやうな、感じがする。併し、又、能く考へて見ると、さう云ふ自分、我なればこそ、實に、能く時間的には無始無終に、空間的には無際無限に、又、本質的には萬有的、一如的に存在することが出来るのである。即ち、我は世界と共に終始し、萬物と共に生成存続して行くことが出来るのである。況んや、若し、これを唯心論的に、逆に、かゝる形なき、影なき、遍通自在なる、我なる感じを土臺とし、我なる意識を根元として、萬物は、皆、此の我れなる意識の所産である、我あればこそ、爲に萬物あり、世界が在るのであり、人間亦在るのであると、かう考へて行つたならば、此の、點の如き我や、實に絶對的に尊とい、有難いものとなるのではなからうか。

斯くの如くに思索して行つて見ると、世界は即ち我、我は即ち世界である。苦の世界を作るのも我なれば、樂の世界を作るのも亦我であつて、世界は、即ち我が意のまゝとなるのである。果して、能く、さう云ふことになれば、これ